

第3章 吉田構内第2屋内運動場新営に伴う発掘調査

1 調査の経過

吉田構内の北西部にあって、陸上競技場の北東部、第1体育館、第1武道場に挟まれた三角形の空地に、第2屋内運動場の新営が計画された。埋蔵文化財資料館運営委員会の判断により、埋蔵文化財資料館では、平成5年8月3日より8月18日まで試掘調査を実施している。調査の詳細は年報XIIIで報告しているが概略を採録する。

試掘調査では体育館新営予定地の四隅に6.0m×6.0mのトレンチを設定した。北東隅をAトレンチ、南東隅をBトレンチ、北西隅をCトレンチ、南西隅をDトレンチとしたが、Aトレンチで大溝を1条検出したが他のトレンチでは顕著な遺構・遺物は検出できなかった。大溝は西肩のみの検出であったが、溝の側部に2段または3段の段掘りがなされていること、溝幅は推定約4m、深さが約60cmであることなどの所見を得た。出土遺物としては、弥生土器、須恵器、砥石などが挙げられる。このうち須恵器は、口径に対して器高の高い、碗状の坏であるが、中村浩氏の陶器編年というⅢ型式1段階のものと考えられた。新営予定地には古代の大溝があることが判明したのである。以上のような試掘調査成果に基づき埋蔵文化財資料館運営委員会は、新営工事に際して事前の発掘調査が必要であると判断した。

その後、平成5年度の補正予算の決定により、工事計画が急遽具体化することとなった。体育館新営工事は平成6年度中の竣工予定となり、事前発掘調査をグランド照明施設新設に伴う発掘調査に引き続いて、平成6年7月16日から10月18日までのおよそ3ヶ月に渡り、新営予定地に南北22m、東西33m、総面積726m²の調査区を設定して実施した。発掘調査の結果、弥生時代・弥生時代から古代にかけて・近世から近代にかけての大小の溝を検出した。なお、平成6年の夏は記録的な猛暑となり、現場作業員確保などに困難が生じた。

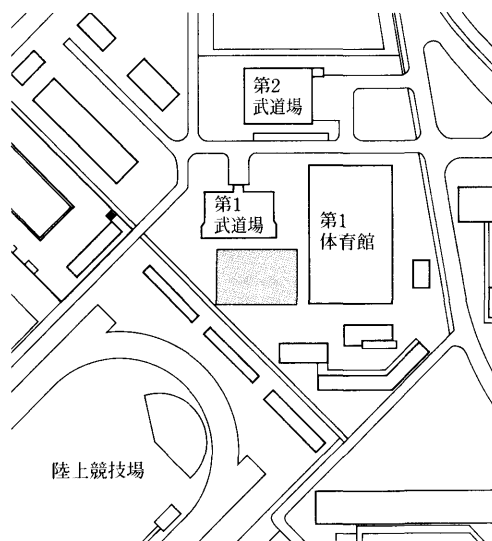


Fig.69 調査区位置図

2 層序 (Fig.71)

第Ⅰ層：表土・造成土

第Ⅱ層：水田耕土

第Ⅲ層：水田床土

第Ⅳ層以下：地山

第Ⅰ層は表土及び本学統合移転のための造成土層である。土質、堆積厚ともに不均一で調査区の北東部分では埋め立てと掘削がくり返された痕跡を残す。厚さは、北東隅で最も薄く約40cm、北西隅で最も厚く約140cmである。第Ⅱ層、第Ⅲ層は本学統合移転直前まで耕作されていた水田に関連する土層である。第Ⅱ層は上中下の3層に分かれるが、大部分で造成時の削平を受けており下層しか残っていない。調査区北西の約1/4部分は、水田耕作面が一段約20cm低くなっているため第Ⅱ層上層の残りが良好で約15cmの堆積をみる。第Ⅲ層は調査区北西部の一段低い部分だけでみられる。第Ⅳ層は黄緑灰色または青灰色シルトの地山である。地山は調査区の北東隅で最も高く、南東部に向かってなだらかに低くなっている。地山上面が遺構検出面となる。調査区北西の約1/4の部分では遺構検出面も一段約20cm低くなる。シルト層以下は基本的には黒茶灰褐色粘質土になるが、場所によっては砂層になるなど地山堆積状況は必ずしも一様ではない。

3 遺構と出土遺物

(1) 概要 (Fig.70, PL.63・64)

遺構は調査区の全域に渡って分布する。検出遺構の大半は溝で、そのほとんどを調査区に斜行して検出した。調査区は方位にそって設置しており、遺構は北から約45°東に振れて配置していることがわかる。北から南への流水が想定できるものが多い。

溝は、大溝・小溝という名称により区別する。大溝は、北東－南西方向のもの2条と、このうちの一つに取り付く北東－南西方向のもの1条を検出した。大溝2では、杭列や底面に杭痕列を検出した。調査区の北側、第1体育館と武道場の間に設置した配線等埋設部分調査区で大溝2の延長を確認している。小溝は、北東－南西方向のもの7条、北西－南東方向のもの2条を検出した。このほかにも、調査区南西隅で、北西－南東方向の近世用水路を検出した。溝以外の遺構としては、貯蔵穴、大土坑を検出した。

出土遺物は、近世用水路から陶磁器がまとまって出土した以外は、いずれの遺構でも小片が主体で、出土状況も散漫であるため遺構の正確な時期決定を困難にしている。最大の問題は、大溝・小溝出土の弥生土器である。全て流れ込みと考えることも可能であるが、新しい時期の遺物が見られないことから遺構の時期として積極的に評価した。

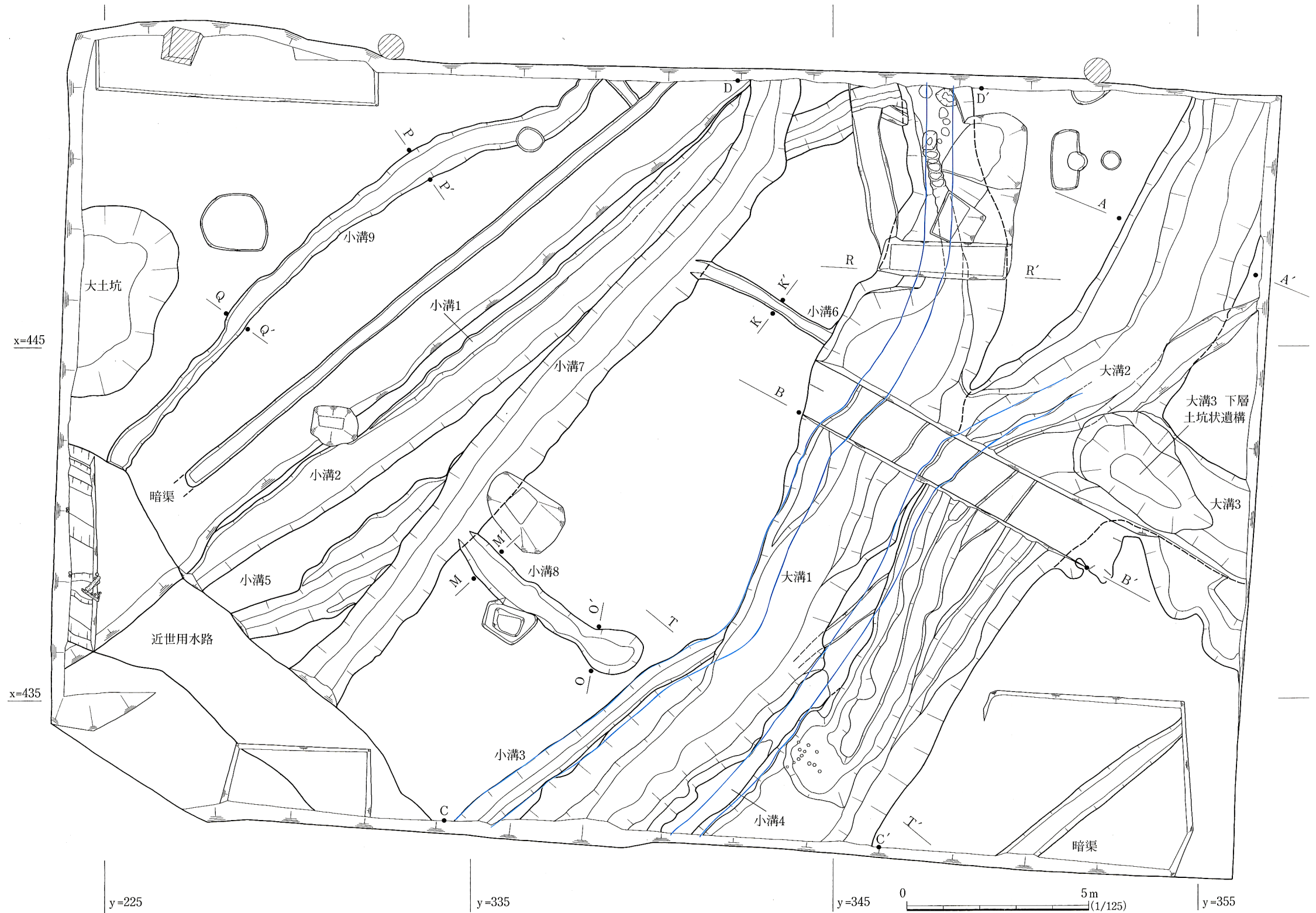


Fig.70 調査区遺構配置図

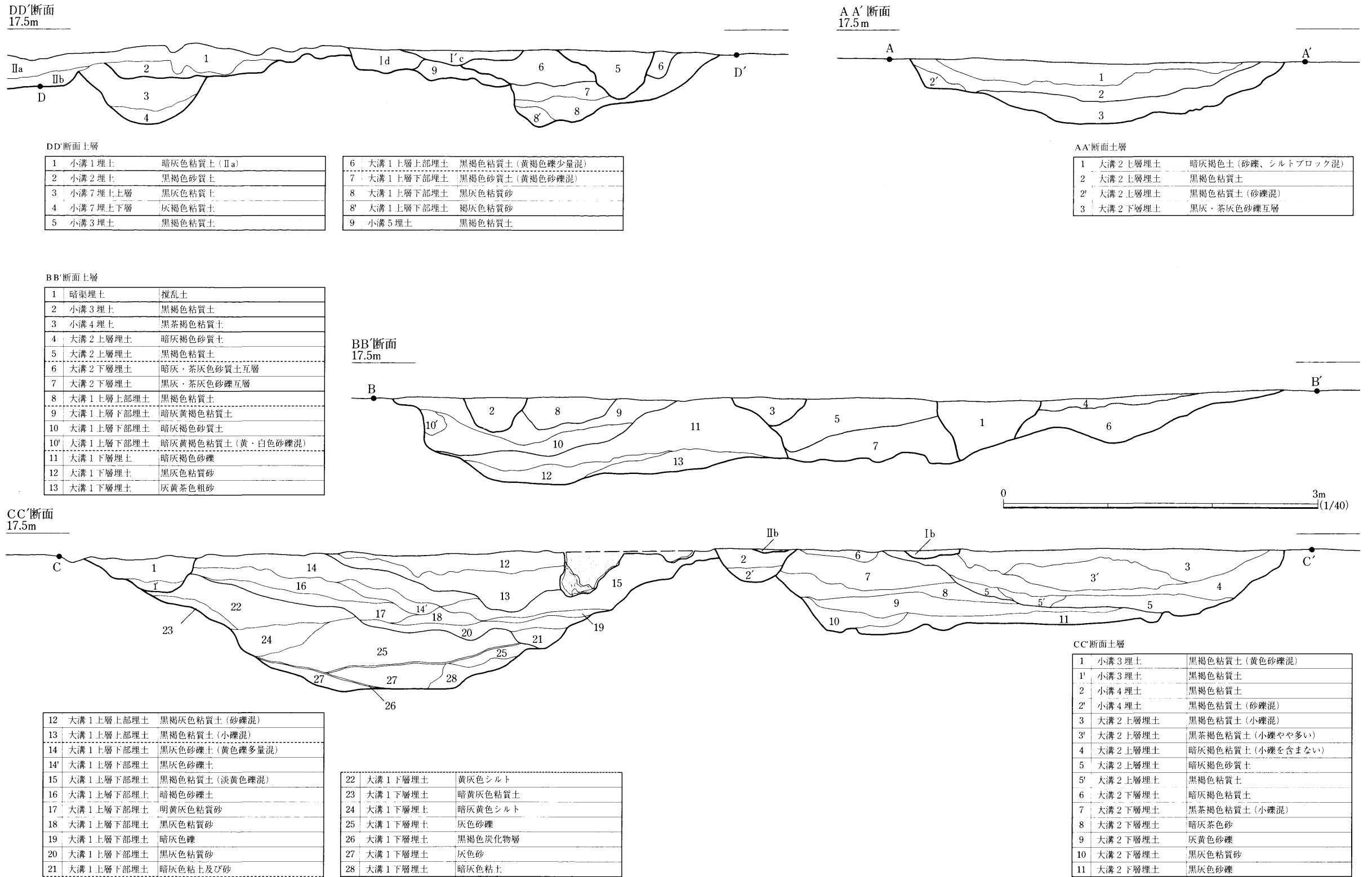


Fig.72 大溝1・2土層断面図

(2) 大溝

大溝 1 (Fig.70・72, PL.64・65(1)(2)・66)

調査区中央やや東よりに位置する北東-南西方向の溝である。検出面での遺構規模は幅約3.5m、深さ68~90cm、調査区内での検出長は約25mを測る。検出範囲に大型のコンクリート塊が設置されており調査に支障を来した。調査小区を設定し北壁~RR'ラインを0区、RR'ライン~BB'ラインを1区、BB'ライン~TT'ラインを2区、TT'ライン~南壁を3区とした。土層は複雑である。南壁(CC'断面)で整理すると、上層上部・上層下部・下層の3つのまとまりに捉えることができ、掘り直しを示すと考えられる。上層上部は黒褐色粘質土を基本とする埋土、上層下部は黒灰色系統の土・砂・礫の互層である。下層は灰色系統の土層で、粘土・シルト・砂・礫の互層となる。比較的粒子の細かい埋土を主体とする上層と、砂礫を主体とする下層では土質に隔絶がある。北壁(DD'断面)では下層を確認していない。これには二つの可能性が考えられる。一つは、上流側となる北壁付近では、上層溝に削られて下層が消滅した可能性で、もう一つは、上層と下層は1区付近で流路を異にする別遺構である可能性である。しかし1区に所在したコンクリート塊による攪乱のため、精査を行うことができず、この点についての所見を得ることができなかった。このため今回は2・3区で上下層として認めうる点にしたがった。

溝底の標高は、上層上部が北壁で16.98m、BB'断面で16.88m、南壁で16.76mである。上層下部では、北壁で16.55m、BB'断面で16.60m、南壁で16.40mである。下層では、BB'断面で16.36m、南壁で16.00mである。以上より、概ね北から南への流水を想定できる。

遺物は各層から出土するが散漫で、集中部分は特にみられない。大部分が弥生土器で時期のわかるものでは後期のものが多い。下層を中心に少量の縄文時代晩期の土器が出土する。新しい時代のもを含まない。磨滅した小片がほとんどで、詳しい時期を特定できるものは少ない。石器では、砥石、擦敲石、剥片が出土しているがやはり少量である。このように、遺物の出土状況は、この溝の機能期間を正確に把握するには不十分で全てが流れ込みの可能性さえある。敢えて出土遺物から積極的に位置付けを行うとしても、埋没時期の上限を示唆するにとどまる。またこの溝は大溝2に先行する遺構である。これらを考え合わせ、大溝1上層は弥生時代になってから掘削され、弥生時代後期中には埋没していたといえる。また、下層の砂礫層を中心として縄文土器が出土していることから、縄文時代晩期の河川を改修して溝を敷設した可能性も考えられる。この溝には、耕作に伴う水路としての機能を想定できる。

大溝2・大溝3 (Fig.70・72, PL.64・65(3)(4)・67)

大溝2は調査区東半に位置する北東-南西方向の溝で、試掘調査Aトレンチで検出していたものである。大溝2の検出面での遺構規模は幅約4m、深さ40~74cm、調査区内での検出長約21mを測る。大溝1・2の検出範囲には、一辺約1.5mの正方形のコンクリート塊が約5m間隔で4個配置されており、調査に支障を来した。調査小区を設定し、北壁~AA'ラインを0区、AA'ライン~BB'ラインを1区、BB'ライン~TT'ラインを2区、TT'ライン~南壁を3区とした。溝の断面形は北側で弧形、南側で底面の広いU字形である。試掘調査では、溝の西側部の一部にテラス状の平坦部を作る段掘りの溝として検出している。今回の調査では、2・3区では溝の東・西側部ともにこのような段掘りは認められなかった。また、この溝の南半では、井桁状に配置された杭列を検出し、溝底一面には、杭跡列と考えられる遺構を検出した。土層を南壁(CC'断面)で整理すると、上層と下層の大きく2つのまとまりとして捉えられる。上層と下層の間には不整合面が見られ掘り直しがなされたと考えられる。埋土は、上・下層ともに黒褐色・暗灰褐色のものが主体となり、上層の土質は細かく、下層の土質は粗い。下層最下部では砂礫が堆積する。土層堆積はAA'断面、BB'断面では比較的単純であり、複雑なCC'断面とは様相を異にする。溝の断面形はAA'断面、BB'断面、CC'断面の3つの土層断面で著しく異なるが、これに関して有効な説明をなし得ない。あたかも別遺構のようであるが、杭痕列を溝底面のほぼ全面に検出したことで同一遺構であることを確認した。

溝底の標高は、上層が北壁で16.82m、BB'断面で16.65m、南壁で16.75mである。下層は、北壁で16.60m、BB'断面で16.52m、南壁で16.55mである。概ね、北から南への流水を想定できる。出土遺物は土器、石器ともに大溝1とはほぼ同様の状況である。ただし、大溝2では、試掘調査で須恵器が出土しており、これから大溝2の埋没時期の上限は古代以降と判断できる。掘削時期は、大溝2は大溝1埋没後に掘削されていることをBB'断面の土層で確認していることから、弥生時代後期が上限となる。

大溝3は、大溝2の途中でこれに取り付く溝である。北東-南西方向の溝で、取り付き部分南側の溝肩部に小規模の崩れがあることから、大溝3側から大溝2に流れ込んでいた可能性が高い。底面の標高は16.62mと大溝2上層底面とほぼ対応する。底面の一部が土坑状にくぼむ。このくぼみは大溝3下層土坑状遺構として後に述べる。大溝3は遺物の出土は散漫であった。大溝2・大溝3とも、大溝1同様の耕作に伴う用水路としての機能を想定できる。

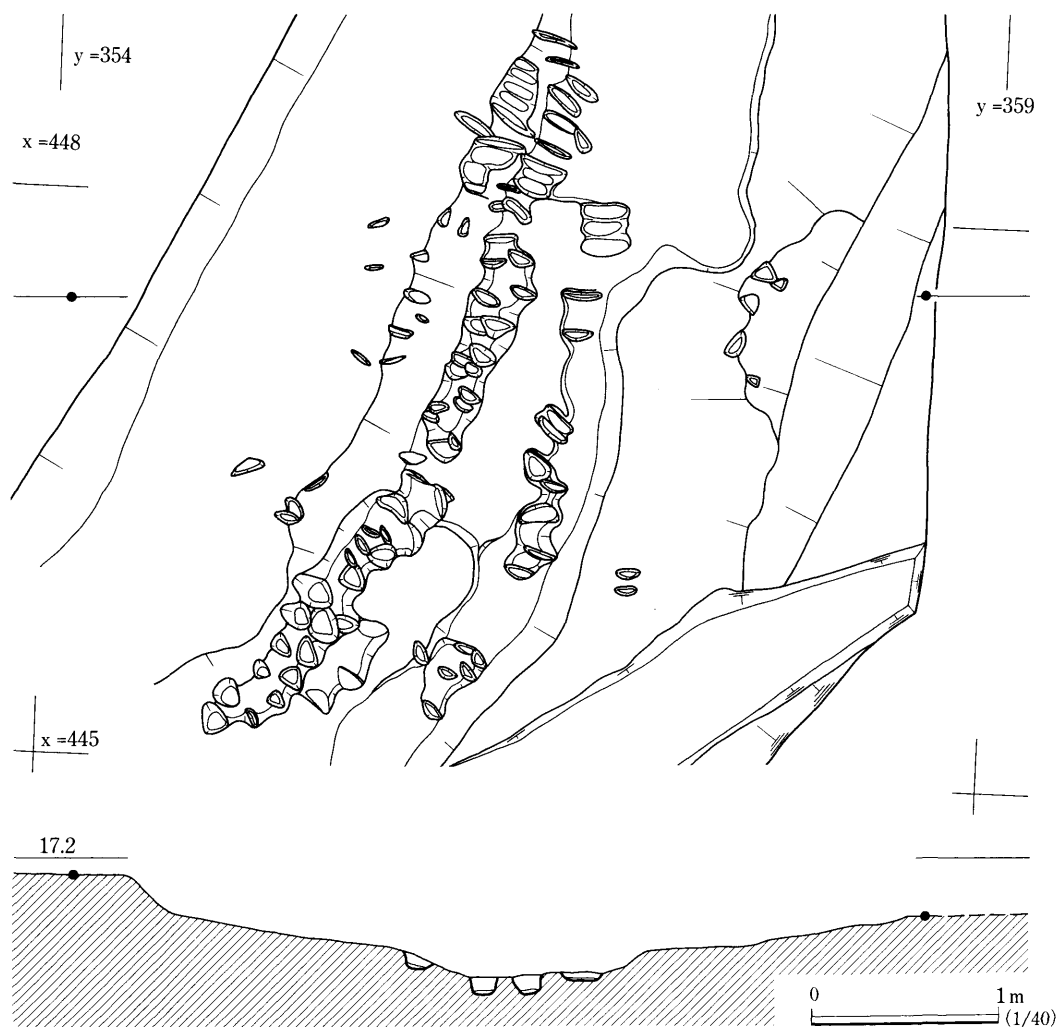


Fig.73 大溝 2 北半杭跡列実測図

大溝 2 杭跡列 (Fig.73, PL.68・69)

大溝 2 の底面で杭跡列と考えられる遺構を検出した。暗黄茶色シルトの地山に、溝最下層埋土の砂質土が充填しているため明確に検出できた。杭跡は、平面形が長軸約10~25cm、短軸約6cmの長楕円形を呈し深さは約2~6cmである。これが法則性を持って配列する。大溝北半では並行して4条の列がみられるが、西から2条目の列が最も規則正しい。南半には3条の列が並行している。本遺構は杭跡列としたが、杭根の残存はなく、現検出面からでは杭として機能するための深さも不十分であるという問題点もあり、鋤跡などの可能性を残す。遺構の正確な評価には類例の集積を含めなお検討を要する。

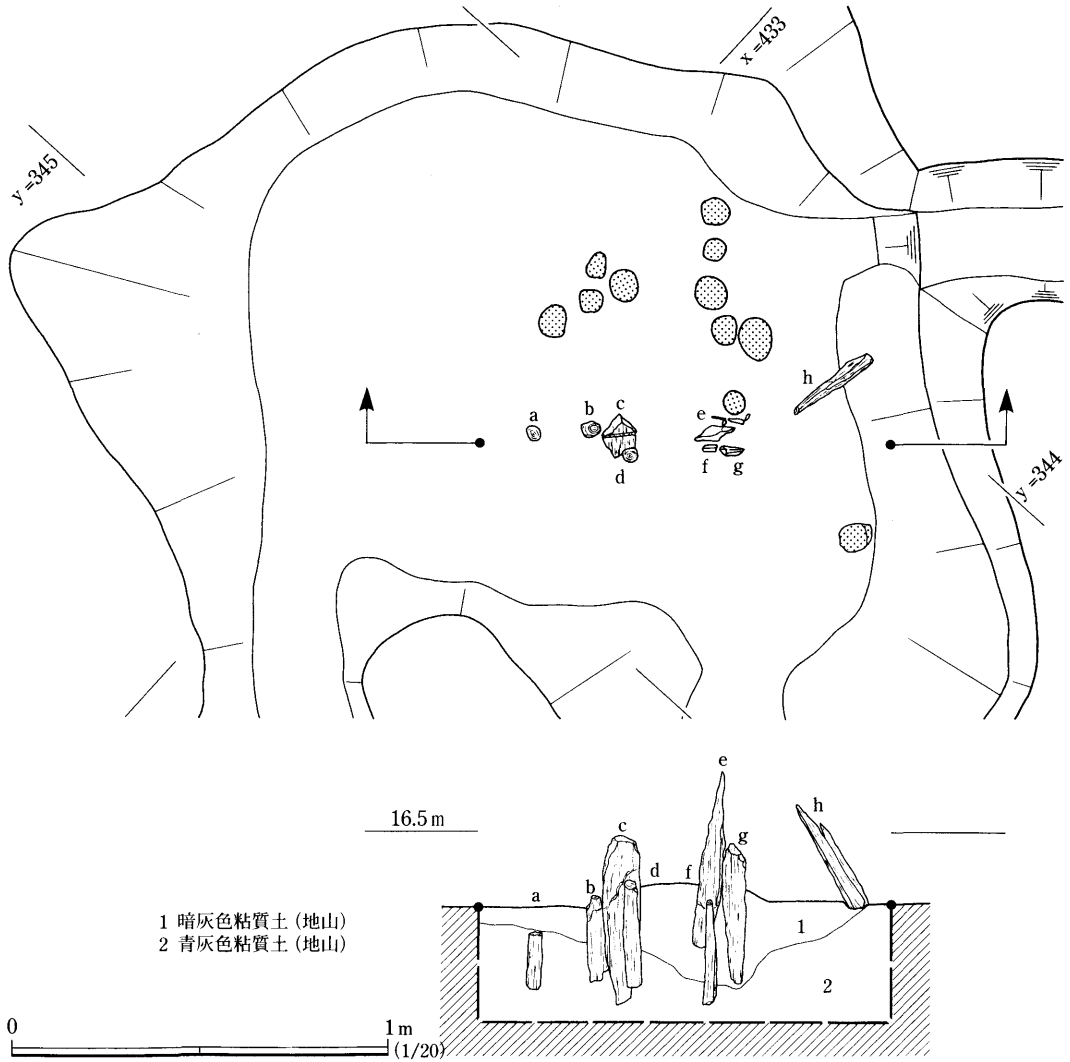
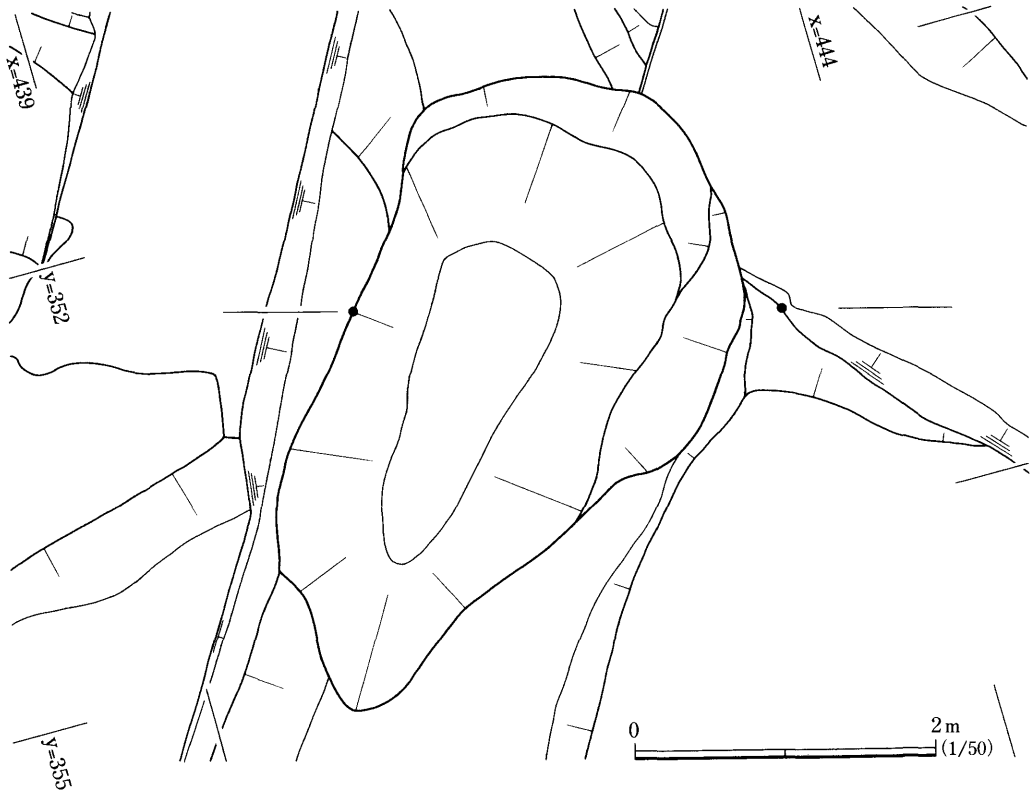


Fig.74 大溝2 杭列実測図

大溝2 杭列 (Fig.74, PL.70)

大溝2 南半で杭列を検出した。杭根は8本で北西-南東方向に並ぶ。b~d、e~gの杭は密集しており、それぞれ3本1単位で機能した可能性があり、2つの単位は約30cmの間隔を持つ。杭には直径4cm程度の丸木と、幅5~10cmの割木があり、検出面からの深さは約30cmを測る。杭列の南側では杭痕跡を検出した。いずれも直径6~9cmの円形で、深さは3~5cmと極めて浅い。杭根及び杭痕跡の検出面は、本来の溝底面であるシルトが抉れて粗砂堆積を形成する。堰のような施設の存在も考えられる。



- 大溝3下層土坑状遺構埋土
- 1 黒灰色粘土砂礫互層
 - 1' 黒灰色粘質砂
 - 2 黒灰色粘質砂
 - 2' 暗灰色粗砂
 - 2'' 黒灰色砂礫
 - 3 黒灰色粘土
 - 4 暗灰黄色砂
 - 5 暗灰青色粘土
 - 6 暗灰色砂

- 大溝3埋土
- ① 中層：黒灰褐色粘質土
 - ② 下層：暗灰色砂礫

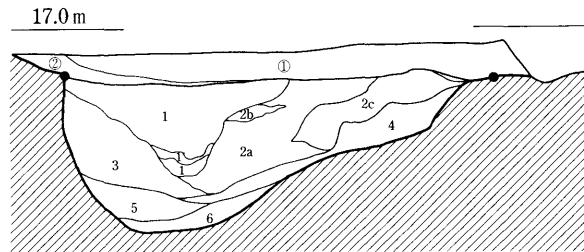


Fig.75 大溝3下層土坑状遺構実測図

大溝3下層土坑状遺構 (Fig.75, PL.71)

大溝3の底面で検出した。平面形は長径約4.5m、短径約2.4mの不整楕円形の土坑で、大溝3底面からの深さは約1m、最下部の標高は15.68mを測る。土層堆積は大溝3とは不整合面を持ち、しかも土坑状遺構南西部の埋土上に杭跡があり、両者の機能期間と埋没時期に時間的な隔絶があったことが明瞭にわかる。遺構埋土は粗砂層と粘質シルト層の互層となり、所々に樹木の枝・葉などの植物遺体を含む黒褐色土層が見られた。遺物は、弥生時代前期から後期の土器が出土した。弥生時代の遺構と考えられる。

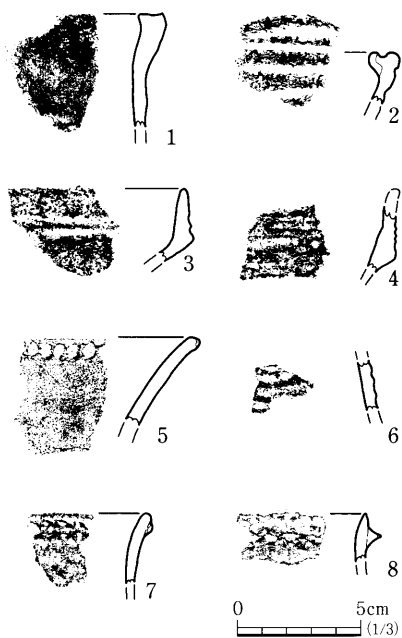


Fig.76 大溝出土縄文土器実測図

大溝出土縄文土器 (Fig.76, PL.77 (1))

1～5・7・8は口縁部、6は胴部の小片である。1が大溝3、2が大溝2で他は大溝1からの出土である。総じて磨滅が激しい。1は薄い器壁に内側から粘土を貼り足しユビオサエでやや外方に張り出し、口唇部をナデで平坦に収める。外面ナデ。2は外面に2条の沈線、口唇部に1条の沈線を施す。3は外反する口縁内側へ粘土を継ぎ足し屈曲部を作り出す。粘土の接合部位を挟んで上下に2条の沈線を施し屈曲部を強調する。4の屈曲部も3と同様の手法と考えられるが磨滅のため不明瞭である。5の器壁は薄く外面ナデ、内面には二枚貝による横方向の条痕を施す。端部外側には巻貝による刻目を施す。7は薄い器壁に粘土紐を貼り付け断面カマボコ形の低い突帯

とし、巻貝による刻目を施す。突帯は端部先端よりやや下がった位置に作らる。内面には貝殻条痕を施す。8も7と同様に突帯を作るが、相違点は断面三角形の高い突帯で刻目の原体も貝ではないと考えられる点である。

大溝出土弥生土器 (Fig.77, PL.77 (2)・78)

9・10は大溝1、11～13・15・16は大溝2、18～20は大溝3、17・21は大溝3下層土坑状遺構からの出土である。9は小型の甕である。器壁が薄く円形の底部を持つ。10は高坏の坏部である。内外面ともに風化が激しい。11は高坏の脚部である。器壁は裾部に向かって薄く、全体に細身で均整のとれたプロポーションを形成する。風化が激しい。坏部との結合部に特徴があり、粘土の剥離状況から、脚部頂部に粘土を覆い被せるようにして脚部と一連で坏部を作ったと考えられる。12は高坏の坏部である。内面は丁寧なミガキ、外面はナデを施す。13は壺の底部。14は甕の口縁部で大溝1・大溝2にまたがる攪乱よりの出土である。15・16は甕の底部である。

17は甕の口縁部である。右下から左上へのハケの後、口縁の下位をナデ消した上で6条のヘラ描沈線を施す。内面には右上がりのミガキを施す。18は高坏の坏部である。内外面ともミガキの後ナデを施す。19は壺の口縁部である。外面には頸部から肩部にかけて放射状にミガキを施す。内面には指頭痕が残る。20は高坏の脚部である。11に比べ、器壁は全

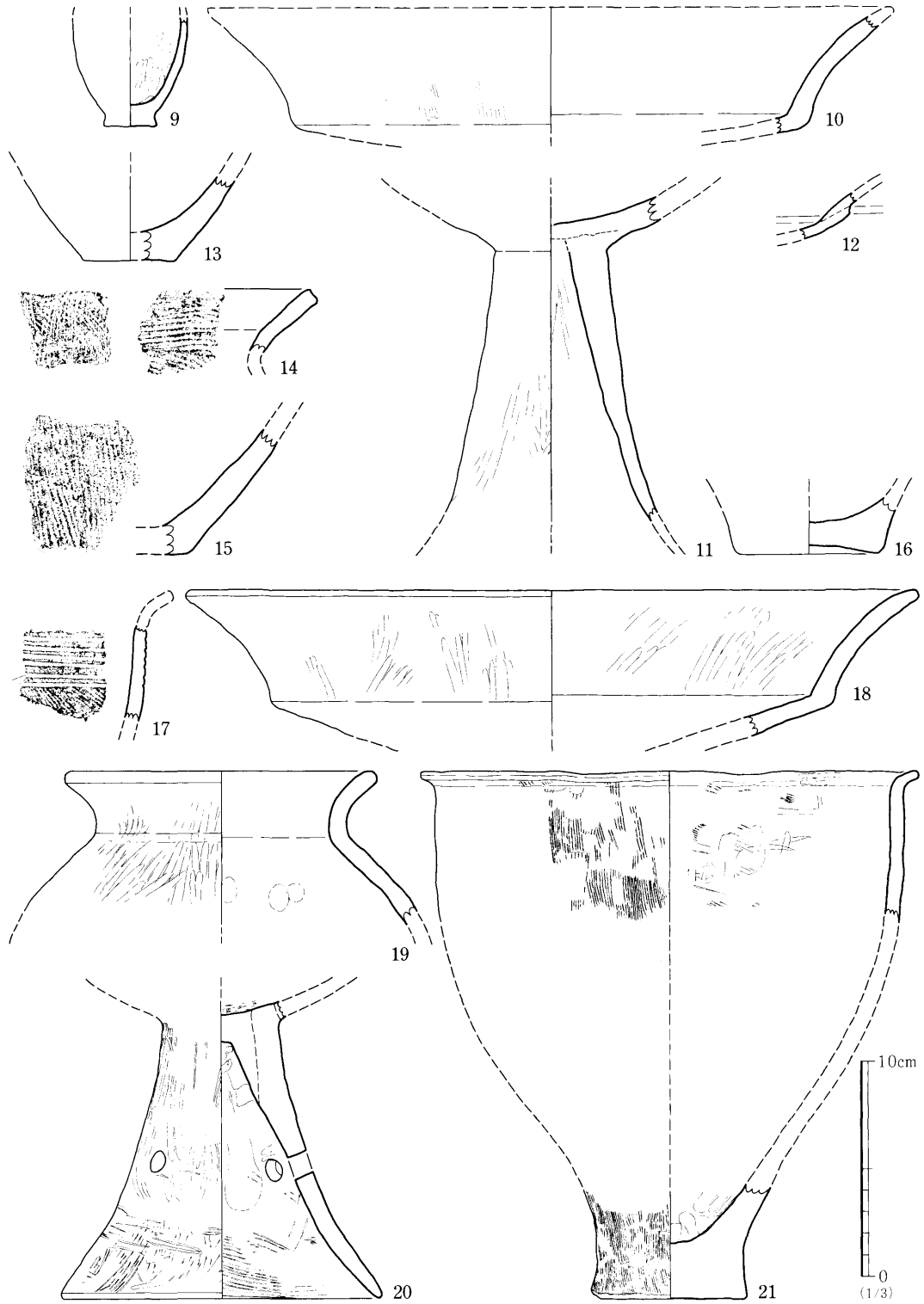


Fig.77 大溝1・2・3及び大溝3下層土坑状遺構出土弥生土器実測図

体的にやや厚く、太めで重心の低いプロポーションである。外面上半には丁寧なミガキ、裾部は目の粗いハケの後ナデを施す。内面には、中空部の頂部に棒状の工具を回転させて粘土塊を押し広げた痕跡が明瞭に残る。内面裾端部から約5cmはハケの後ナデを施す。円形の透かし孔が3つ見られ、復元すると全部で5方向の透かし孔があったと考えられる。21は如意形口縁を持つ甕である。接合点はないが、図上復元している。外面には下から上へのタテハケを施し、口縁の屈曲部の下をヨコナデする。内面はケズリの後ナデを施す。

大溝出土石器 (Fig.78, PL.79)

22・23・28～30は砥石である。22は横断面正方形で側部の4面を砥面として使用する。石材は硬質のため使用痕は残らないが、左側面以外の3砥面の平面性は比較的高く、よく使用していることがわかる。上端部にはあばた状の敲打痕がみられる。折損部の稜にも潰れが見られ、折損後敲打石に転用したことがわかる。中型の粗粒砥石である。23は長方体状で、側部の4面を使用する。表・裏の砥面は特に平面性が高く、長軸方向の反り、短軸方向のくぼみもほとんどない。稜には打撃による潰れがみられ敲打石としての使用を想定できる。石材は硬質で使用痕などはみられない。中型の粗粒砥石である。28は破片である。砥面は1面見られ、小片のため平面性は確認できないが、明瞭な使用痕が観察できる。浅いV字状の切れ込みを形成しており、この中央部から放射状の線状痕が刻まれる。小さいし中型の中粒砥石である。29は平板状で、表・裏・下端部の3面を砥面とする。平面性は比較的高い。被熱したようで、破損面は赤褐色化し、表層は風化が著しく白色化して脆くなる。使用痕は見られない。小型の中粒砥石である。30は表の1面は明瞭な砥面で、長軸方向には反りがあるが短軸方向にはほぼ平坦である。左側部下半の平坦面も砥面の可能性が強く、面の反りはほとんど無く、短軸方向にはややふくらむ。小型の中粒砥石で手に持ったの使用が想定できる。あるいは土器の表面調整での使用も考えられる。

24は磨石・敲打石である。本来の楕円球形が半分程度に折損している。全面を擦っており平滑で、磨石としての使用が主体であったと考えられるが、上端部と裏にはあばた状の敲打痕が見られ敲打石としても使用されていたことがわかる。折損部の稜にも潰れが見られ、この利用形態は折損後も変わらなかったと考えられる。裏は擦りによる使用が著しく平坦面を形成する。この平坦面の上半分、折損後の石器形態からすれば裏の中心部にあばた状の敲打痕が集中する。磨石として使用する際に圧搾物の滑り止めを目的とした意図的な打痕とも考えられ注目される。25は台石の破片と考えられる。変形の三角錐状で、台石の角の頂部が欠けたものであろう。全体に被熱し白赤色化している。

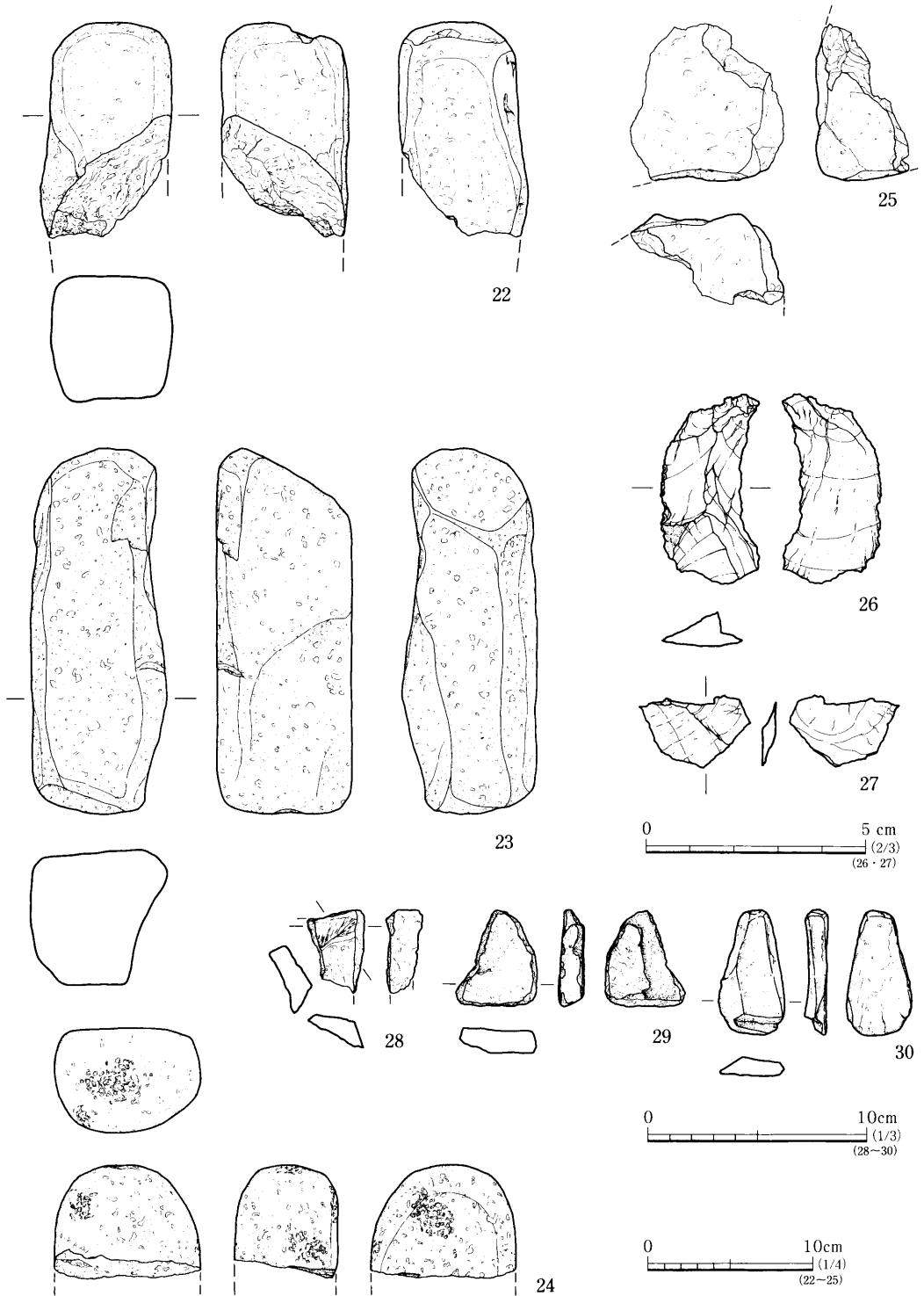


Fig.78 大溝出土石器実測図

26・27は剥片である。26は縦長の剥片である。上端部に主要剥離面側からの2回の剥離調整が行われており、これによって打面が失われている。背面には他に4面の素材剥離面がみられる。上方向からのものが2面、下方向からのものが1面、最も古い左方向からのものが1面である。この剥片が剥離された石核では、90度ないし180度の打面転移を行いながら、連続的な剥片剥離作業が行われた可能性が高い。左側縁辺には使用によるものが微細な剥離痕が連続している。27は横長の剥片である。背面には左上方からの剥離面があり、これが打面を取り去っているが、この剥離自体が剥片の剥離と同時であると考えられる。剥離調整、使用痕などはみられない。

(3) 小溝

小溝としたものには、幅40cm程度の小規模なものから幅1.5m程度の中規模のものまで含めている。これらの小溝からの出土遺物はそのほとんどが小片で数も少ないため、遺構の時期を細かく特定できない。そこで、遺構の重複による相対的な前後関係とこれを基にした大まかな時期の把握にとどまった。基準となるのは、小溝7、小溝5、大溝1の重複関係である。

小溝7は小溝5に先行する遺構で、小溝5は大溝1上層下部と同時期になる可能性が高い。小溝5・小溝7の出土遺物は、ほとんどが小片ではあるが全て弥生土器と考えられる。これらのことを考え合わせると、小溝5・小溝7は弥生時代の遺構と判断できる。埋土の状況から考えて、小溝6は小溝5と、小溝8は小溝7と同時期と考えられる。小溝9も弥生時代の遺構であろう。小溝3は大溝1が、小溝4は大溝2が埋没した後の遺構である。小溝1、小溝2からは陶器が出土しており、近世以降の時期が考えられる。このように、現状で把握できる遺構の時期は非常に大まかにならざるを得ない。下の表にまとめる。

Tab.6 小溝一覧表

遺構名	方 向	幅 (cm)	深さ (cm)	検出長 (cm)	流 水 方 向	推 定 時 期
小溝1	北東－南西	40～50	14	13.0	南西→北東	近代～現代
小溝2	北東－南西	140	20	16.5	北東→南西	近世～近代
小溝3	北東－南西	90	37～44	24.5	南西→北東	古墳時代～中世
小溝4	北東－南西	90	30	14.5	南西→北東	古代～中世
小溝5	北東－南西	120	17～38	24.5	北東→南西	弥生時代
小溝6	北西－南東	40	8	4.0	北西→南東	弥生時代
小溝7	北東－南西	150	50～71	22.5	北東→南西	弥生時代
小溝8	北西－南東	80	10	6.0	不明	弥生時代
小溝9	北東－南西	40～110	17	17.5	南西→北東	弥生時代

小溝 1 (Fig.70・81, PL.72・73)

調査区の西半部分に位置する。溝底の標高は、調査範囲のほぼ中央部で17.10m、北壁付近で17.05mを測り、南西から北東方向への流水が想定できる。小溝2の上部に位置し小溝2が埋没した後に敷設されている。遺構配置図は小溝2を掘り上げた段階のため、ほとんど図示し得ていない。出土遺物は陶器碗が1点出土している他は小片ばかりで数も少なく、正確な時期決定には不十分であるが、埋土の状況を考えあわせると近代から現代にかけての溝と判断できる。

小溝 2 (Fig.70・81, PL.72・73)

調査区西半部分に位置し、流路は小溝1とほぼ重なる。溝底の標高は、調査区北壁土層で17.05m、近世用水路に削平される南端部分で17.00mを測ることから、北東から南西方向への流水が想定できる。出土遺物は小片ばかりで数も少なく、正確な時期決定には不十分であるが、埋土の状況を考えあわせると、近世から近代にかけての溝と判断できる。

小溝 3 (Fig.70・72, PL.72・73)

調査区東半部分の西寄りに位置する。大溝1の上部、西肩部分に位置する。溝底の標高は、調査区南壁土層で16.93m、BB'ライン上で16.82mを測り、南西から北東方向への流水が想定できる。遺物は出土しておらず、遺構の重複、埋土の状況から、大溝1埋没以後すなわち古墳時代以降で近世以前と考えられる。

小溝 4 (Fig.70・72, PL.72・73)

調査区東半部分の西寄りに位置する。大溝2の上部、西肩部分に位置する。BB'ライン以南を中心に検出した。検出長約14.5m、溝底の標高は、調査区南壁部分で17.05m、BB'ライン上で16.78mを測り、南西から北東方向への流水が想定できる。この溝は本来、北方向に伸展していたと考えられるが、攪乱によって遺構の検出は不可能であった。遺物は出土しておらず、遺構の重複、埋土の状況から、大溝2埋没以後すなわち古代以降で近世以前と考えられる。

小溝 5 (Fig.70・79・81, PL.72・73)

調査区西半部分に位置する。小溝7の上部に位置しており、小溝7が埋没した後に新規に敷設された溝と考えられる。検出範囲の大部分で2つの溝はほぼ完全に重複するが、調査区外へ向かっての流路の伸展方向が小溝7とは異なる。溝底の標高は、調査区北壁土層で16.97m、近世用水路の掘削によって削られている南端部分付近で16.90mを測り、北東から南西方向への流水が想定できる。調査区北壁付近で大溝1から枝分かれし、約3m西方向

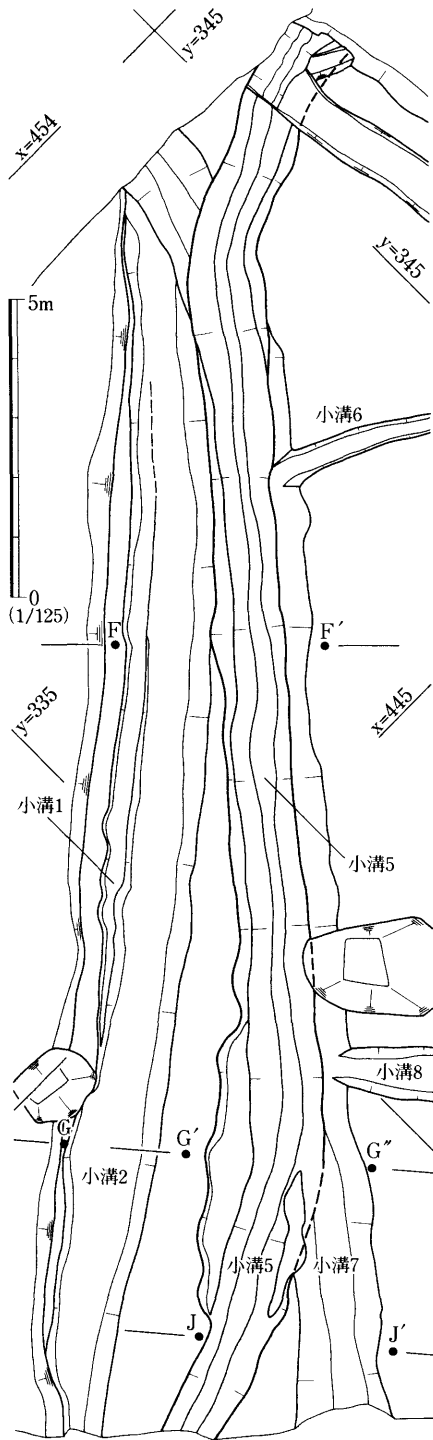


Fig.79 小溝5 平面図

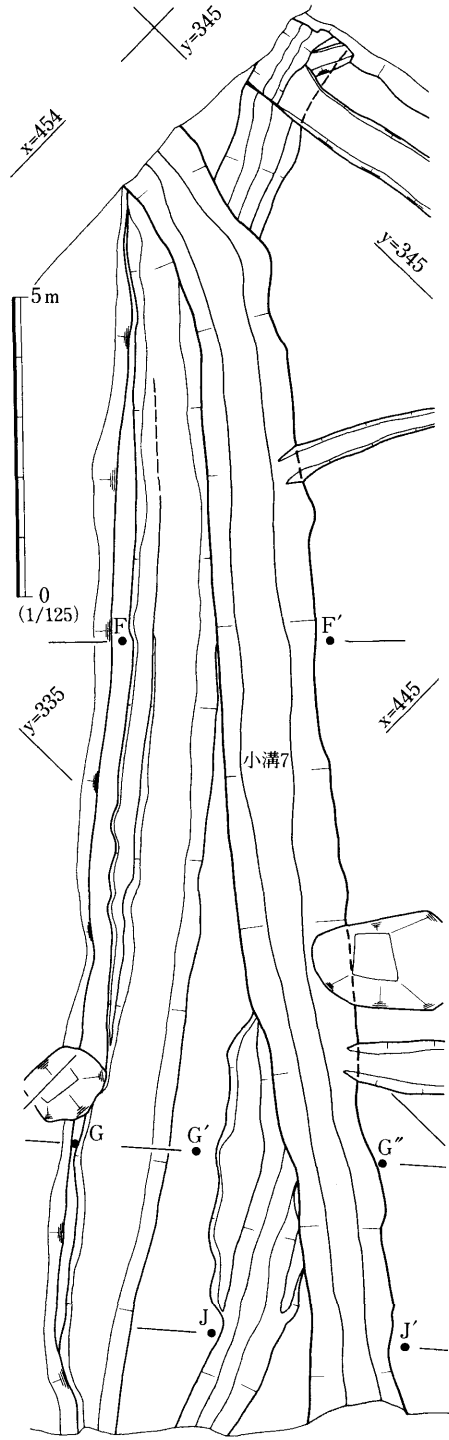


Fig.80 小溝7 平面図

小溝

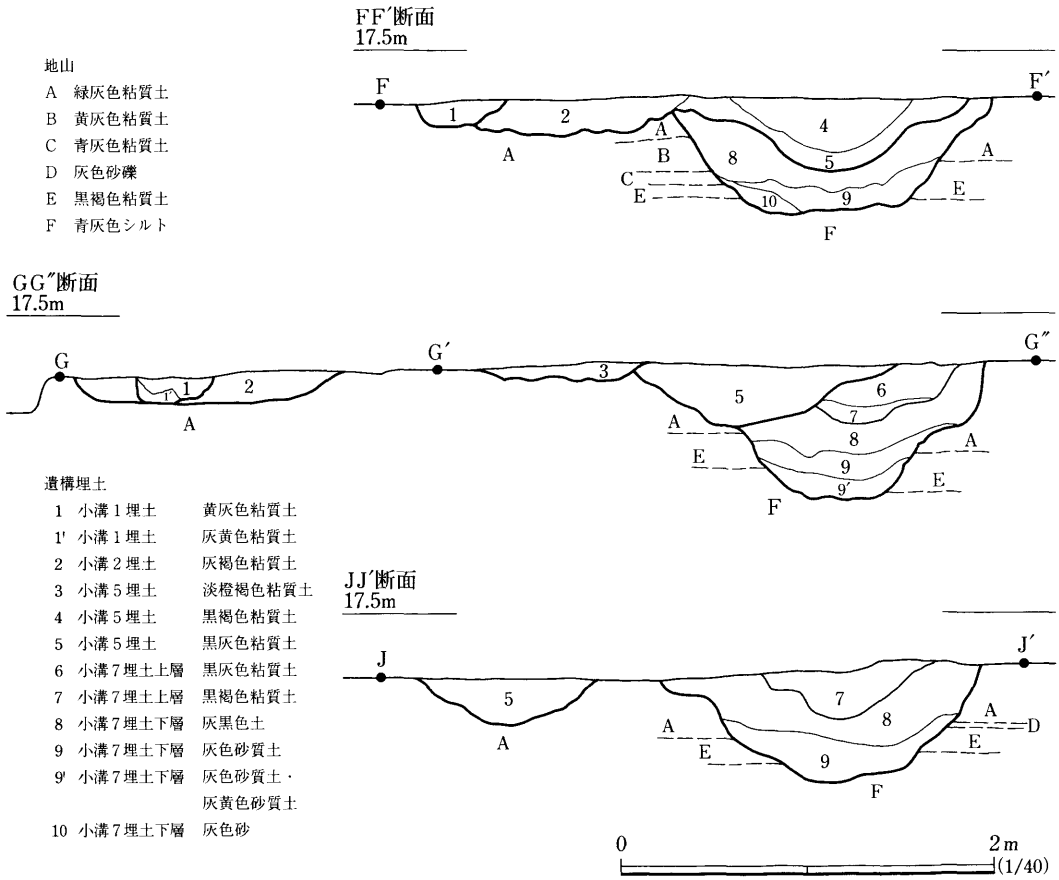


Fig.81 小溝5・7土層断面図

に伸展した後に、やや東よりに方向を変えて南流している。

出土遺物は少ないものの埋土の下半部分、特に溝底付近に集中し、上半部分ではほとんど出土しなかった。いずれも弥生土器の小片で、遺物からの時期判断は困難である。調査区北壁土層から大溝1上層下部とほぼ同時期であったことが判断できる。

小溝6 (Fig.70・82, PL.72・73)

調査区中央部の北半に位置し、小溝5と東側の大溝1を連結する可能性がある。溝底の標高は、小溝5と分岐する部分で17.14m、大溝1との交差部分で17.08mを測ることから、小溝5から大溝2への流水が考えられる。遺物は出土していない。

小溝7 (Fig.70・80・81, PL.72・73)

調査区西半部分に位置する。小溝5と重複し下位に位置する。溝底の標高は、調査区北壁付近で16.64m、近世用水路の掘削によって削られている南端部分で16.60mを測り、北東

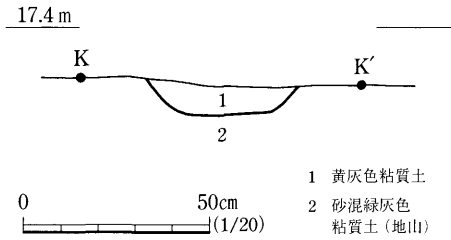


Fig.82 小溝 6 土層断面図

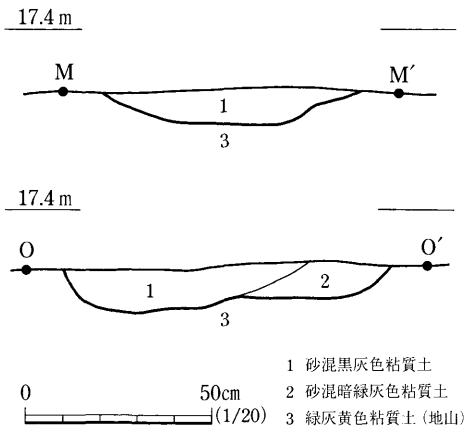


Fig.83 小溝 8 土層断面図

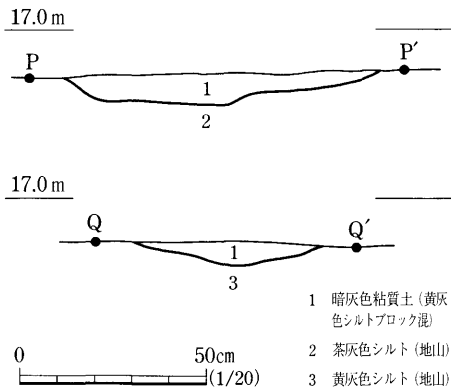


Fig.84 小溝 9 土層断面図

から南西方向への流水が想定できる。この溝は、調査区北壁付近でほぼ真南に約3m伸展した後に、やや西向きに曲折しそのまま南西方向に延びている。埋土は大きく上層と下層に分けることができる。下層の方が色調が淡くやや灰色が強くなるが、土質に大きな差はみられないため、溝の掘り直しは想定していない。

出土遺物は少ないものの埋土の下半部分、特に溝底付近に集中し、上半部分ではほとんど出土しなかった。いずれも弥生土器の小片であり、遺物からの時期判断は困難である。小溝 5・大溝 1 に先行する遺構であるが、埋土の色調・土質から考えて大ききな時間差は考えにくい。

小溝 8 (Fig.70・83, PL.72・73)

調査区中央部の南半に位置し、小溝 7 から分岐し、東に延びる。南東側は削平により遺構が消滅している。溝底の標高は、小溝 7 から分岐するあたりで17.16m、大溝の側で17.12mを測り、小溝 7 の側から東の方向への流水が考えられる。遺物は出土していない。

小溝 9 (Fig.70・84, PL.72・73)

調査区の北西部分に位置し、北半部分はやや蛇行する。溝底の標高は、調査区北壁付近で16.70m、近世用水路の掘削によって切られている南端部分付近で16.74mを測り、南から

北への流水を想定できる。近・現代の水田耕作によって、上部はかなり削平されており残存状態は悪いが、溝底面の標高は小溝 5 と同程度である。少量の弥生土器が出土するが小片ばかりである。

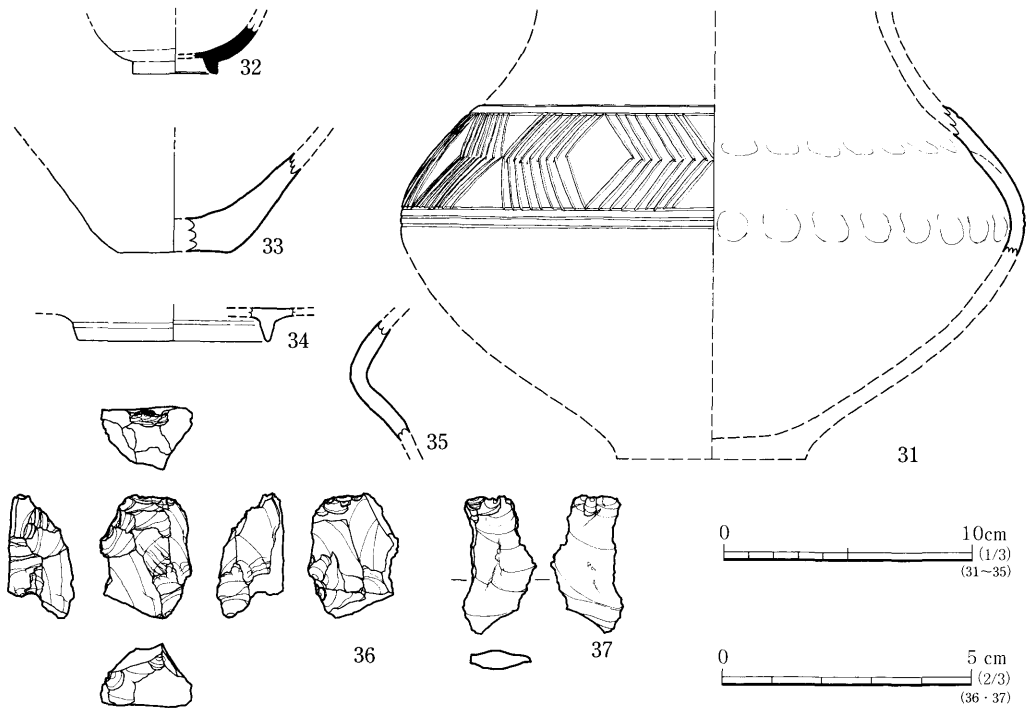


Fig.85 小溝等出土遺物実測図

小溝出土遺物 (Fig.85, PL.80)

31は小溝7出土の前期弥生土器の胴部上半の破片である。肩部に段を持ち、この直下と胴部最大径の位置に沈線による区画を行い文様帯とし、ヘラ描沈線による無軸羽状文を施す。内面には上下2列の指頭痕と意図して施したのではないがヘラ状工具による幅2~3mmの沈線が2条認められる。山口盆地内では、小路遺跡第12号溝に次ぐ古手の様相を持つ前期弥生土器である。32は小溝1出土の陶器碗である。高台内のケズリは深く底部は薄い。藁灰釉を施し、見込みには貫入がみられる。底部露胎。33は小溝5出土の甕底部である。内外面ともに風化が激しい。34は小溝9出土の土師質土器の高台である。35は小溝9出土の弥生土器である。壺の口縁部と考えられるが内外面ともに風化が激しい。36は小溝5出土の楔形石器である。残核を素材とする。左側縁から表への3枚の剥離面が石核としての最終作業面で、左側縁上半部がこの打面である。上下縁辺には使用による潰れが顕著であるが、剥離調整は行っていない。37は縦長の剥片である。磨滅と風化が激しい。左右の側縁に自然面を残しており、薄い板状の原礫を石核とした剥片か、または目的剥片剥離の早い段階で生成した剥片であることがわかる。

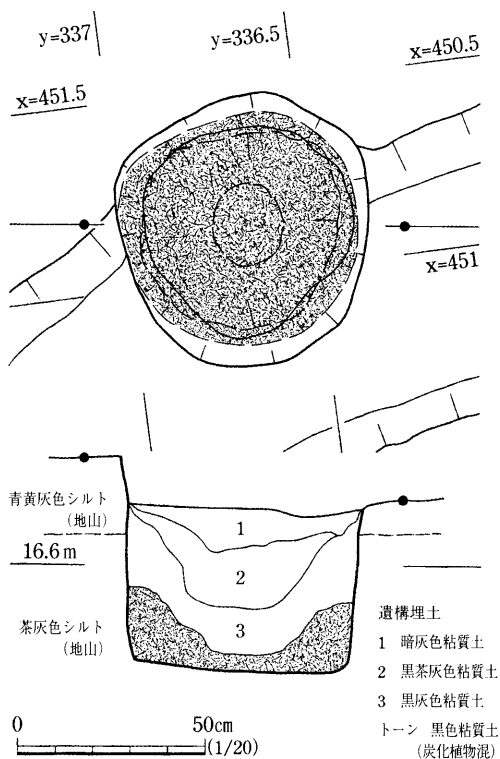


Fig.86 貯蔵穴実測図

(3) その他の遺構

貯蔵穴 (Fig.86, PL.74)

小溝9と重複しており調査区北壁から約2mの位置で検出した。小溝9との前後関係は確認できなかった。長径73cm、短径66cmと平面正円に近く、現存で55cmの深さを測る。底が平坦なピーカー状の穴である。穴底には、炭化した植物が層を成して堆積していた。堆積状況は穴の中心部では薄く5cm程度、外縁部では厚く18.5cm程度となる。このため炭化物上面は中心部がくぼむ播り鉢状を呈する。出土遺物はなく遺構の正確な時期は不明であるが、状況から判断して縄文時代の貯蔵穴の可能性が考えられる。

大土坑 (Fig.87, PL.75 (1)・81 (1))

近世用水路のすぐ北側で、調査区西壁に接して約半分を検出した。南北5.5m、東西約4.8mの平面楕円形と推定できる。現存で約1.0mの深さを測る。近世用水路と同時に埋められており、用水溜池のような機能が想定できる。調査範囲内には、近世用水路との間に堰などの施設は検出できなかった。遺構に伴うものではないが、遺構南東部の底面から、須恵器坏が出土している。胎土は精良で、体部は緩く屈曲し、屈曲部外面に沈線を施す。ハの字形に張り出した背の高い高台を持つ。丁寧な作りである。7世紀末の年代があたりよう。

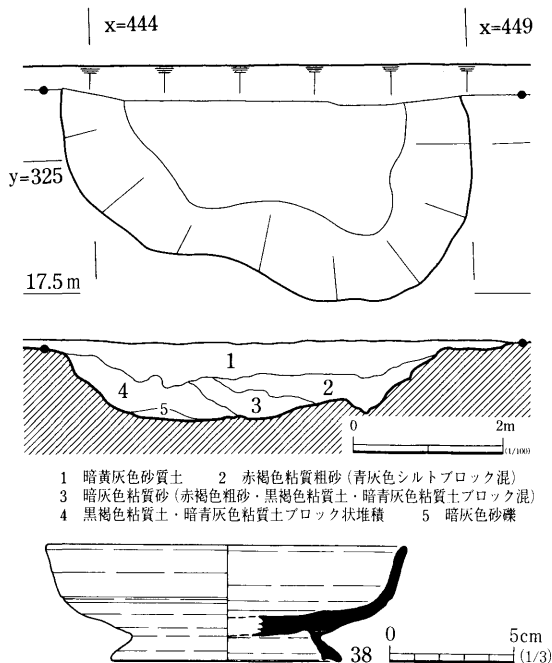


Fig.87 大土坑及び出土土器実測図

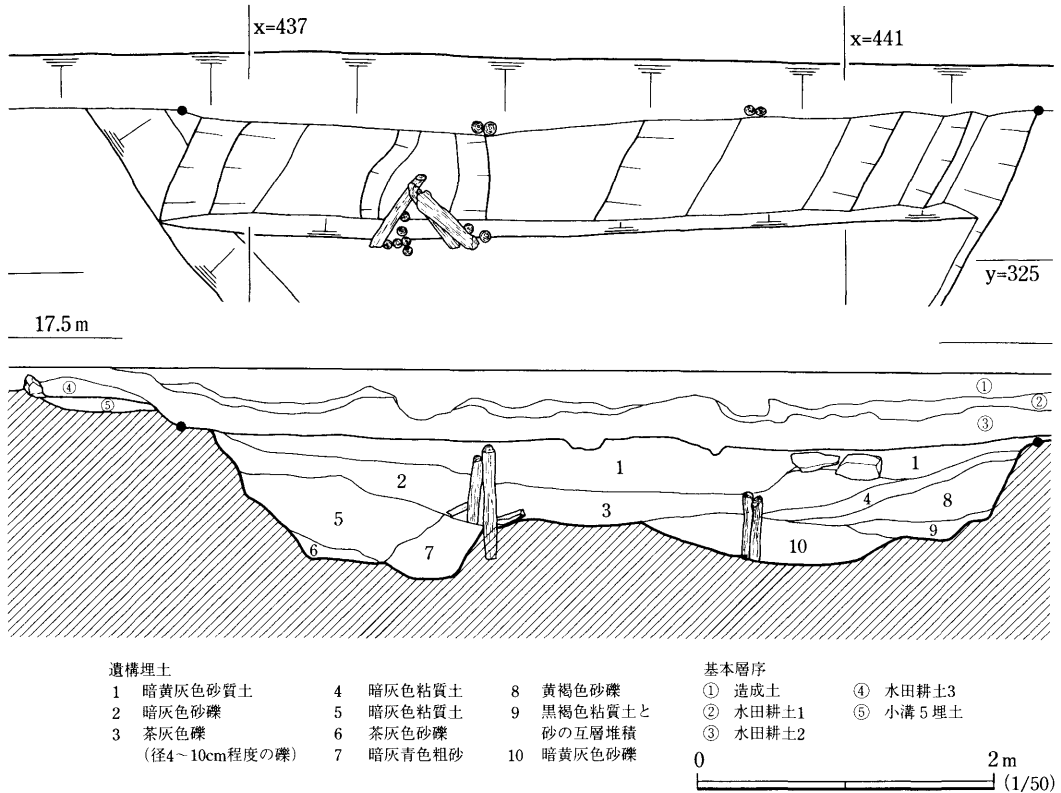


Fig.88 近世用水路実測図

近世用水路 (Fig.88, PL.75 (2))

調査区の南西隅部分に位置する北西-南東方向の溝である。幅約2.5~4m、検出面からの深さ約1.1mを測る大規模なもので、調査区内で長さ約11.5mを検出した。断面形は逆台形を呈し木杭の設置がみられる。多量の近世陶磁器が出土したことから近世用水路とした。調査当初、本学統合移転直前まで機能していた溝と考えていたため、調査区西壁際を部分的に調査するにとどめた。出土遺物は18世紀後半から19世紀末を中心とする。

調査区西壁で土層断面を観察すると、用水路南肩の上部が、統合移転直前の水田区画の段差によって削平されていることが明瞭に観察できる。また、埋土4層以後と5層以前の堆積は不整合面を形成しており、改修が行われていることがわかる。検出した木杭は、打ち込まれている深さから、改修と同時あるいは以後に設置されたと考えられる。これらの木杭の南東側には、用水路に取り付くと考えられる小溝2があることから、取水口を伴う堰が設置された可能性を想定できる。灌漑用水路の幹線として機能していた可能性が高い。報告する遺物は2~4層で出土した。

近世用水路出土土器・粗陶器 (Fig.89~91, PL.81 (2)・82 (1)・92 (1))

39は瓦質土器足鍋の脚部である。握り締め後ナデ。胎土は砂粒(石英・長石)を含み、外面・断面とも2.5Y8/3(淡黄色)、ただし風化のため表面が失われ、元の色調をとどめない。40は甕の口縁部。粗製であるが堅牢で須恵質に近い。口径40cm以上。内外面ナナメハケ後ナデ、口縁部ヨコナデ。砂粒(石英・長石)を含み、5Y~7.5Y6/1(灰色)。

41・42は土師質陶器の甕である。41は復元口径29.0cm、外面横方向ケズリ、内面ヨコハケ・ナナメハケ後ヨコミガキ、口縁部ヨコナデ。胎土は砂粒(石英・長石)をわずかに含

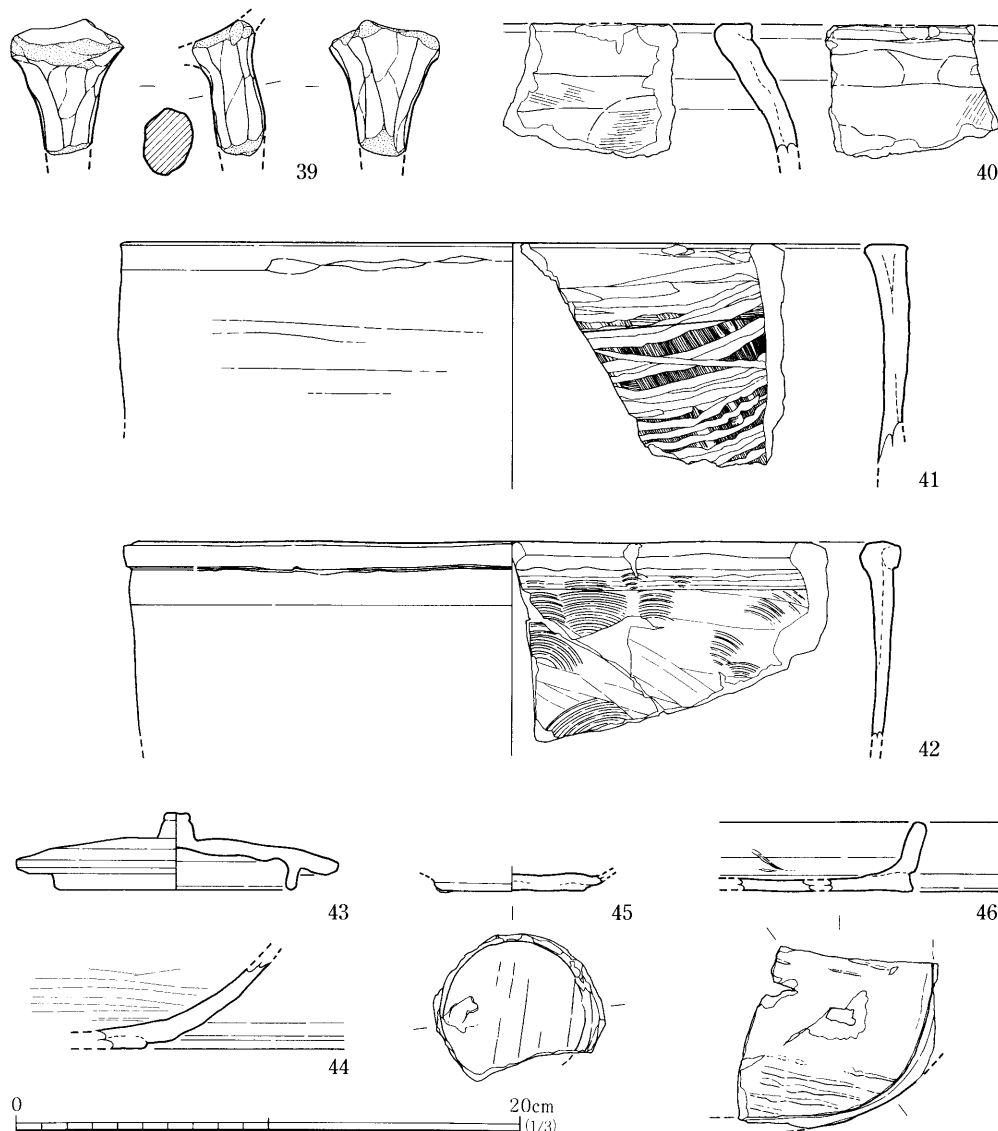


Fig.89 近世用水路出土土器・粗陶器実測図(1)

み、7.5YR8/4 (浅黄橙色) を呈する。42は復元口径29.7cm、体部は叩き締め後ナデ、内面に同心円状の当て具痕を残す。口縁部ヨコナデ。色調は外面・断面10YR8/4 (浅黄橙色)、内面10YR6/4 (にぶい橙色) である。41・42ともに19世紀、在地産。

43は土師質土器の蓋である。内面中央に型押し時の指痕を放射状に残したまま口縁部を貼り付け、円に沿ってナデを施す。円はやや不整である。在地産。44は土師質土器の底部小片。外面ヨコナデ、内面ヨコミガキ、外底面未調整。胎土は微砂粒 (石英・長石) を少量含み、外面10YR6/4、内面・断面10YR7/3 (にぶい黄橙色)。45は土師皿の底部。外底面回転ヘラ起こし、板目を残す。内底面ヨコナデ後一方向ナデ。胎土は微砂粒 (長石) を少量含み、色調10YR7/4 (にぶい黄橙色)。46は土師質陶器の盤で、平面形は長円形または隅丸方形と考えられる。体部は、底部と接合後ヨコナデ、ただし接合部付近は未調整。内底面不定方向ナデ、外底面は未調整で板目を残す。胎土は少量の砂粒 (石英・長石) を含み、色調7.5YR7/4 (にぶい橙色)。粗製ではあるが焼成良好、硬質な仕上りをみる。

47～52は土師質あるいは瓦質の大型粗陶器で、いずれも在地産である。47は埋設して使用する大型甕の口縁部で、口径70cm以上に復元できる。口縁端部から外面にかけてヨコナデ、外面に沈線を1条施す。内面に同心円状の当て具痕とナナメハケを残す。胎土は

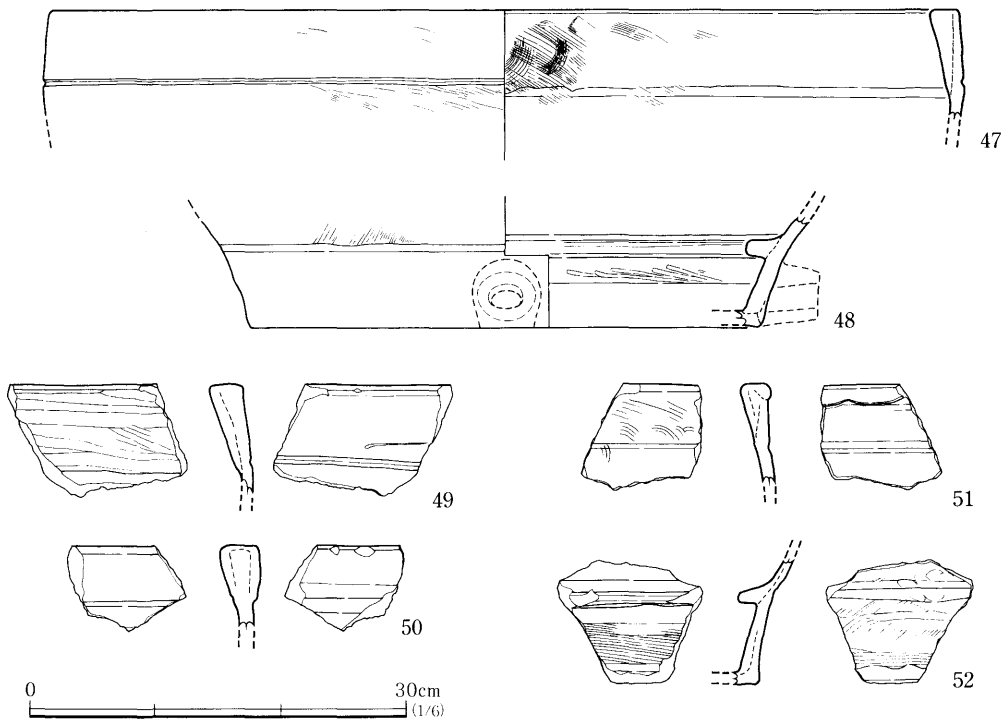


Fig.90 近世用水路出土土器・粗陶器実測図 (2)

7.5YR7/3 (にぶい橙色) で、砂粒 (石英・長石) を含む。48は風呂甕の底部である。復元底径41cm、内面に踏板を受けるための突起を貼り付ける。外面上部ナナメハケ、外面下部と内面ヨコナデ、外底面未調整。胎土は粗砂粒 (石英・長石) を含む、色調は外面7.5YR6/4 (にぶい橙色)、断面・内面10YR8/4 (浅黄橙色)。図上で排水口を推定復元した。

49～51は口縁部小片、径は算出できない。49は土師質で、微砂粒 (石英・長石) を含む胎土。内外面ヨコナデ、外面に凹線1条。色調10YR8/3 (淡黄色)、外面は一部赤変し2.5Y6/4 (にぶい橙色) となる。50は瓦質、通称「黒焼き」である。胎土は微砂粒 (石英・長石) を含む。内外面ともヨコナデ、外面に凹線1条。51は土師質で、粗砂粒 (石英・長石) を含む。叩き締めた後外面ヨコナデ、内面ナナメハケとナデ。口縁の折り曲げ方は不整で粘土がはみ出す。外面にくびれ状の凹線1条。52は土師質、風呂甕の底部小片である。48と同様、内面に突起をもつ。胎土は粗砂粒 (石英・長石) を含む。外面ヨコナデ、煤が付着する。外底面は未調整。内面ナナメハケ後、突起を貼り付けヨコナデ。色調は外面5YR

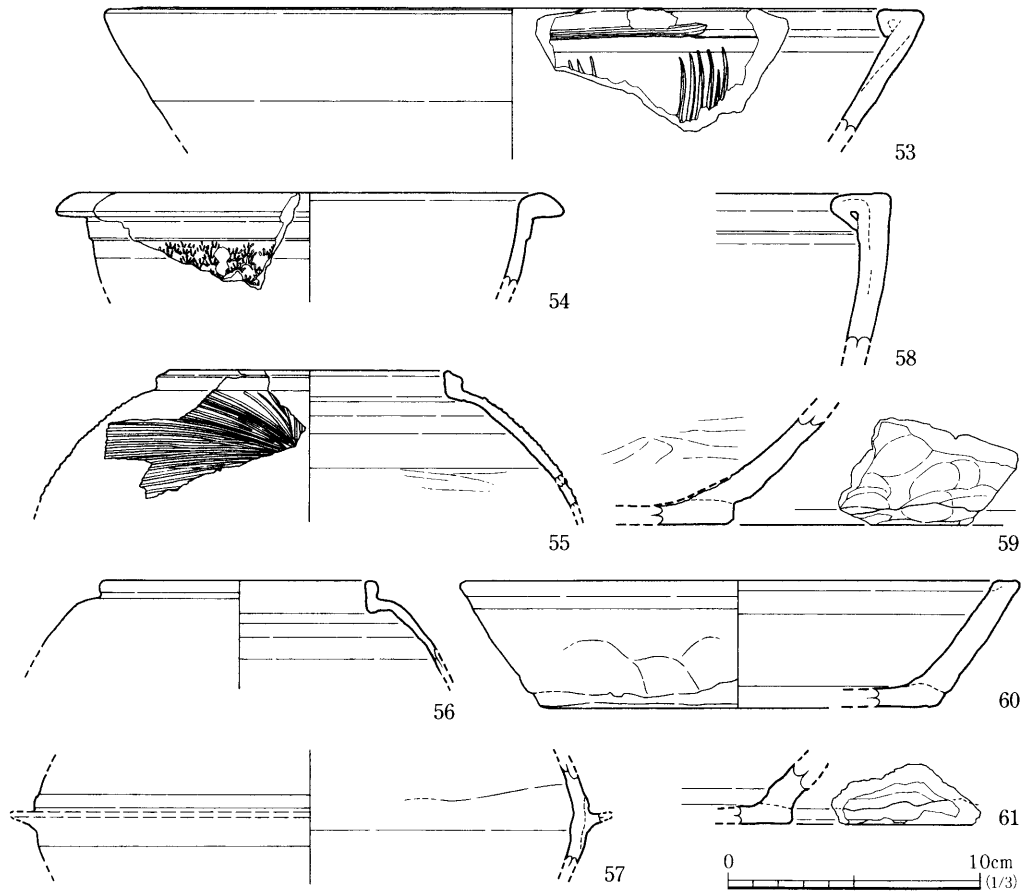


Fig.91 近世用水路出土土器・粗陶器実測図 (3)

～7.5YR6/4 (にぶい橙色)、断面・内面10YR7/4 (にぶい橙色) を呈する。

53は瓦質土器の播鉢である。復元口径29.5cm。外面ヨコナデ後不定方向ナデ、指痕を残す。内面ヨコハケ後、6条単位の播目を刻む。口縁部は折り曲げて断面逆三角形におさめ、ヨコナデを施す。一部強いヨコナデ。外面・断面2.5Y6/1 (黄灰色)、内面2.5Y2/1 (黒褐色)、微砂粒 (石英・長石) を含む。54は瓦質土器。型押しで外面に模様を浮き出させる。内外面N3/0 (暗灰色)、断面2.5Y8/3 (淡黄色) を呈し、胎土には砂粒を含まない。植木鉢か。

55は瓦質土器、土瓶もしくは釜と推定し復元した。短く立ち上がる口縁をもち、復元口径は11.1cm。外面型押しにより放射状の模様を浮き出させる。内面はやや雑なヨコナデ。口縁部ヨコナデ。胎土は微砂粒 (石英・長石) をわずかに含み、外面5Y2/1 (黒色)、内面5Y5/1 (灰色)、断面2.5Y6/3 (にぶい黄色)。在地産。56は55と似た器形で、土師質。復元口径10.3cmで土瓶と考えられるが、器壁が薄い。胎土は微砂粒 (石英・長石) を少量含み、外面・断面10YR8/3 (浅黄橙色)、内面7.5YR7/4 (にぶい橙色)、口縁部立ち上がり付近7.5YR7/4 (にぶい橙色) を呈する。在地産。57は土師質の羽釜で、最大内径20.8cmに復元できる。胎土は精緻な粘土で、わずかに砂粒 (石英・長石) を含む。外面は罫を貼り付けた後ヨコナデ、下半はナデで煤N2/0 (黒色) が付着する。内面ヨコナデ、色調は7.5YR6/4 (にぶい橙)、断面も同色である。

58は瓦質土器。小片のため口径復元不能。胎土は砂粒 (石英・長石) を含み、色調2.5Y7/2 (灰黄色) ～ 8/2 (灰白色)。甕か。59・61は瓦質土器の底部小片。ともに風化しており表面の残りはよくないが、体部内外面ナデ、外底面未調整である。59は外面・断面2.5Y8/2 (灰白色)、内面7.5Y5/6 (明褐色)、61は外面・内面5Y5/1 (灰色)、断面10YR7/4 (にぶい黄橙色)。60は瓦質土器の焙烙である。器高5.0cm、復元口径20.6cm。胎土は砂粒 (石英・長石) ・小礫 (石英) を含み、色調2.5Y8/2 (灰白色) を呈する。外底面に煤2.5Y3/1 (黒褐色) が付着。在地産。

近世用水路出土陶磁器 (Fig.92～94, PL.92 (2) ～94)

62～80・82は陶器である。62は高台を欠く1/5片。2.5Y8/3 (淡黄色) の素地に藁灰釉2.5Y8/1～2 (灰白色) を施す萩焼の皿である。内面に目跡を1ヶ所残す。19世紀。

63～65は萩焼である。いずれも浅い天目碗風の器形で、復元口径11.4～7cmと法量が近似している。63は2.5YR8/3 (淡黄色) の素地に藁灰釉2.5Y8/1 (灰白色) を施す。外面下半の露胎部分は5YR6/6 (橙色)。復元高台径4.0cm、高台内を深く削り、底が薄い。64は素地10YR8/4 (浅黄橙色)、藁灰釉10Y8/1 (灰白色)、外面下半の露胎部分は7.5YR7/6 (橙色) で

ある。65は素地5Y8/2(灰白色)に鉄釉7.5YR4/4(褐色)～2/1(黒色)を施す。いずれも19世紀。66は底部で、上半を欠くため全体のフォルムは不明である。素地5Y7/2(灰白色)～6/2(灰オリーブ色)、内底面に凹線を1条巡らせ、鉄釉5Y8/2(灰白色)をごく薄く施す。高台は露胎である。

67は、接合点を持たない2片を図上で復元し、端反小碗とした。薄手で焼成良好、口縁部は磁器に近い質感を呈する。素地2.5Y8/3(淡黄色)、口縁部断面5Y6/1(灰色)、藁灰釉5Y6/2(灰白色)。萩焼、19世紀。68は碗の底部。復元高台径4.1cm、素地2.5Y8/3(淡黄色)に藁灰釉10Y8/1(灰白色)を施す。外面露胎部分は5YR5/4(にぶい赤褐色)～7.5YR7/4(にぶい橙色)。萩焼、19世紀。69は碗で、上半を欠く。高台径3.8cmを測り、10YR7/3(にぶい黄橙色)の素地に藁灰釉10YR8/1(灰白色)を施す。内面はロクロ目に沿って細い横縞をなす。萩焼、19世紀。70は碗の底部。高台径3.0cmとやや小ぶりである。素地2.5Y8/2～7/1(灰白色)、藁灰釉5Y8/1～8/2(灰白色)。萩焼か。19世紀。71は碗の底部小片である。復元高台径3.3cm。素地2.5Y8/2(灰白色)～8/3(淡黄色)に鉄2.5Y4/1(黄灰色)で絵付後、

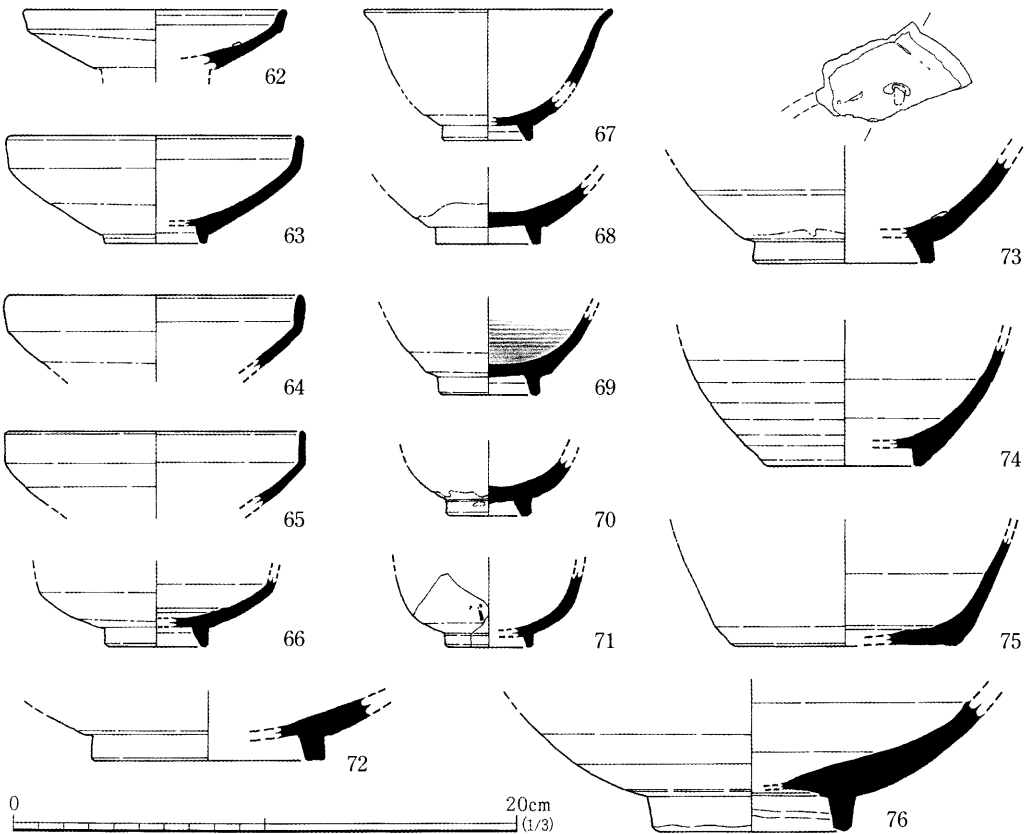


Fig.92 近世用水路出土陶磁器実測図(1)

灰釉を施し、内外面とも5Y8/1(灰白色)となる。

72は皿または鉢の底部小片で、復元高台径9.1cm。素地5Y7/2(灰白色)～2.5Y7/3(浅黄色)に、藁灰釉2.5Y8/3(淡黄色)を施す。73は鉢の体部～底部である。復元高台径7.0cm。素地10YR8/3(浅黄橙色)に透明釉を施し、施釉部分は外面・内面とも10YR5/4(にぶい黄褐色)を呈する。内面に目跡を1ヶ所認める。

74は瓶である。碁笥底で、復元底径6.1cm。素地10YR7/3(にぶい黄褐色)、外面に灰釉2.5Y5/1(黄灰色)～7/2(灰黄色)を施し、畳付を釉剥ぎする。内面は無釉。

75は底部。復元底径8.8cm、徳利か。素地N7/0(灰白色)～2.5Y8/4(淡黄色)、外面に鉄釉5YR4/1(褐灰色)を施し、内面は無釉7.5YR5/2(灰褐色)。76は鉢の体部～底部で、復元高台径7.4cm。色調は内外面とも7.5YR5/3(にぶい褐色)、断面10Y6/1(灰色)。焼締。

77・78は搦鉢である。77は口縁部で、復元口径32.4cm。素地2.5YR5/1(黄灰色)、鉄釉10YR4/1(褐灰色)～3/1(黒褐色)を施す。肥前系。78は体部～底部で、高台径9.7cmを測る。高台に重ね焼き痕が残り、内底面に砂が付着する。素地は断面アンコ状を呈し、表面

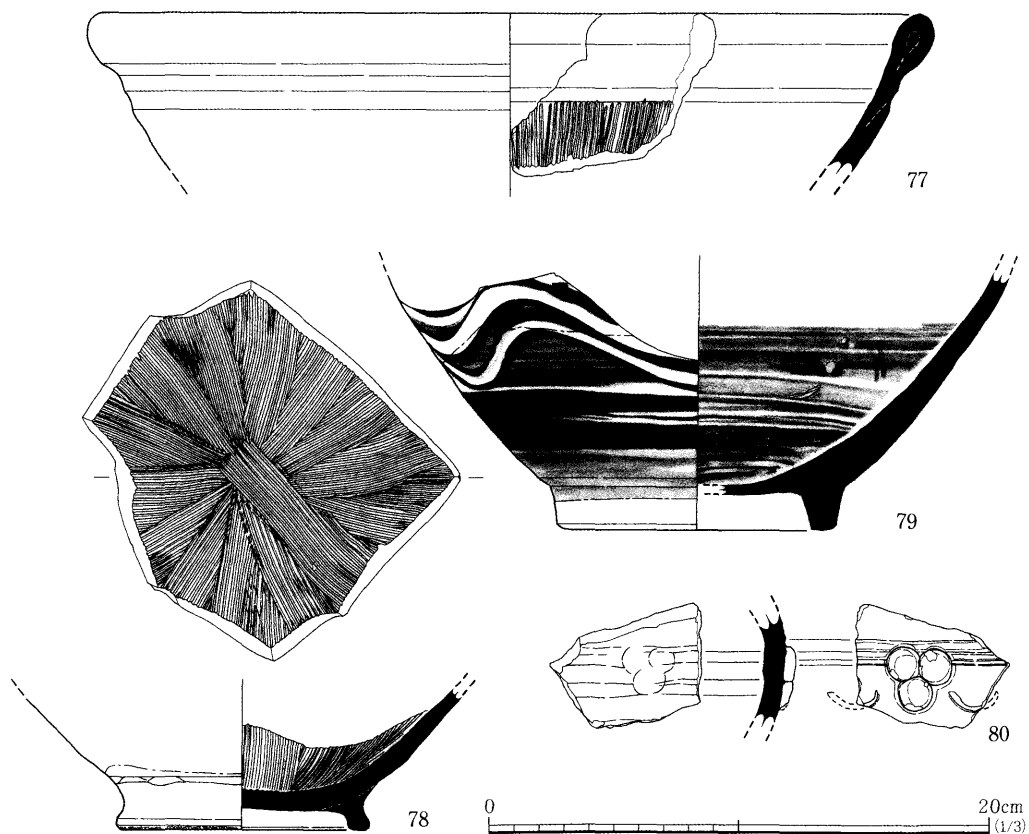


Fig.93 近世用水路出土陶磁器実測図(2)

付近は5Y4/1(灰色)、中心部は2.5Y6/1(黄灰色)。内面に鉄釉7.5YR5/2(灰褐色)を施す。釉は外面下方にも薄く及び10YR5/2(灰黄褐色)を呈する。萩焼。

79は肥前系の鉢。復元高台径10.0cm、分厚く堅牢である。いわゆる「刷毛目唐津」で、素地5YR6/4(にぶい橙色)に、白泥5Y8/1(灰白色)と鉄7.5YR5/3(にぶい褐色)～7.5YR4/1(褐灰色)の二彩を施して後、透明釉をかける。内面の布目状の痕跡は施釉前のものである。80は体部小片、壺か。凹線を3条巡らせ、貼付文とヘラ描きを施す。素地10YR8/4(浅黄橙色)～7/4(にぶい黄橙色)で、内外面とも鉛釉7.5YR3/4(暗褐色)。

81・83～88は磁器。81は肥前産染付皿である。内面に草花文と五弁花をあしらい、高台内に渦福銘を置く。18世紀。82は肥前系陶胎染付碗で、磁胎に近い。素地5Y7/1(灰白色)。83は白磁紅皿である。素地・釉とも白色、内面と外面上半に施釉。肥前系。

84は染付碗の底部である。全面施釉。豊付は釉剥ぎし、砂が付着する。肥前系か。85は色絵。瓶の底部で、外面のみ施釉、豊付を釉剥ぎする。高台外面に圈線2.5YR4/6(赤褐色)1本。内底面に釉が飛散する。肥前系か。86～88は小片で、いずれも染付碗である。88は人工コバルトを用いており、近代以降の製品と考えられる。

89は陶胎の皿である。素地2.5Y8/3(淡黄色)に内外面とも白色不透明の釉を施す。内底

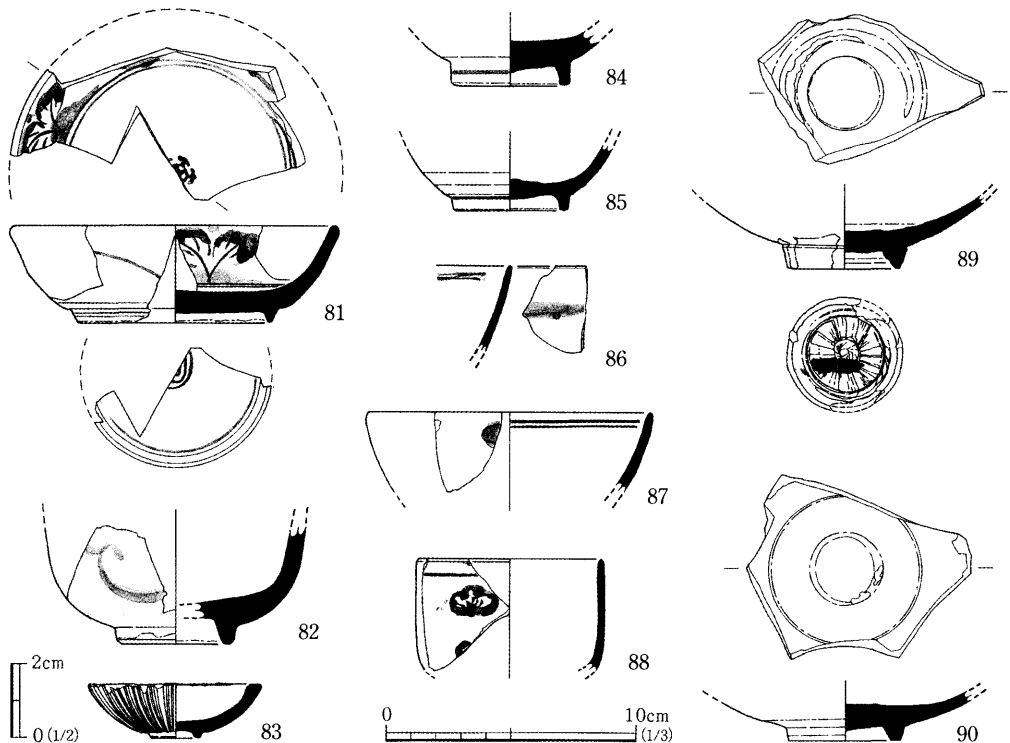


Fig.94 近世用水路出土陶磁器実測図(3)

面は蛇の目状に釉剥ぎし、重ね焼き時の癒着痕を残す。口縁部近くの器壁の薄い部位は硬質で磁胎に近く、白色となる。高台は露胎で、高台内に墨書があり「一」と判読できる。肥前系。90は89と同様の皿であるが、磁胎。素地・釉ともに白色で、内底面に砂が付着する。肥前系。

石製品・木製品 (Fig.95, PL.82)

91・92は砥石である。91は硬質の石材で、表と右側部の2面の使用面は比較的平面性が高い。表には左右方向の線状の使用痕と敲打痕がみられる。破損後に敲石として利用されたと考えられる。中型の中粒砥石である。92は軟質細粒の石質で仕上砥と考えられる。表と裏が本来の使用面であったはずであるが、完全に剥落している。剥離面はリングが明瞭で打点を特定できるものもあり、意図的な剥離を行った可能性もあるが、判断は困難である。下側と右側は平坦に整形される。特に下側の面には斜方向の擦痕が見られ、切断時の鋸刃の痕と考えられる。

93は連歯の子供用の下駄である。木心より右側を使つての木取りである。歯は右側のすり減りが大きく、鼻緒の孔の左側がやや広くくぼむのは、親指の接触による摩耗のためと考えられることから右足用であった可能性を想定できる。

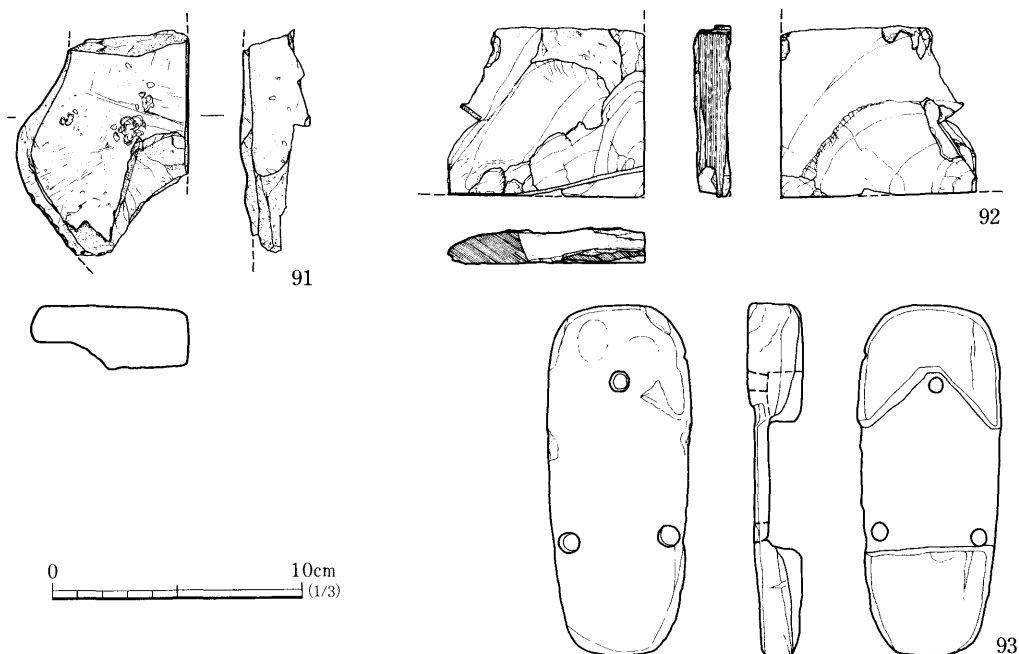


Fig.95 近世用水路出土石製品・木製品実測図

小結

今回の調査では主に水利用に関連する遺構群を検出した。時期的には大きく三つに区分できる。一つは大溝1の機能時期を中心とした弥生時代後期までの時期、二つめは大溝2の機能時期を中心とする弥生時代後期から古代にかけての時期、三つめは近世用水路の機能時期を中心とした主に18世紀以降から近代にかけての時期である。

大溝1は大溝2に、小溝7は小溝5にいずれも流路方向を同じくしてほぼ同一位置に改修されている。これらの溝は埋土の状況から、大溝1上層上部は小溝5と、大溝1上層下部は小溝7と一対で使用されたことも考えられる。水利施設の幹線と支線としての役割を果たしていた可能性もあり興味深い。大溝1の掘削時期は出土遺物が散漫なため確定はできないが、下層の粗粒砂礫堆積から突帯文土器が出土していることから、縄文時代晩期以来の河川を基に掘削した可能性がある。また、小溝7から古い様相を持つ前期弥生土器が出土していることから考えて、大溝1の掘削時期はあるいは弥生時代前期まで遡る可能性も考えられる。大溝1から大溝2への付け替えでは流路の重複が見られないことから、時間的な隔絶を想定する必要がある。大溝2は西肩部に3段掘りがなされていること、杭根や杭痕列などの遺構がみられることから、大溝1より人工的要素が強く基本設計の違いを見いだせる。吉田遺跡の南西約1kmに位置する小路遺跡の発掘調査では、古代の大溝が検出されており周辺地域の大規模な開墾の表徴として位置付けられる可能性が指摘されている¹⁾。小路遺跡の大溝の時期は、今回調査の大溝1・大溝2の機能時期とはやや異なっている。しかし特に大溝2は流路方向が山口盆地で想定されている条里地割²⁾の軸方向と概ね一致することから、大溝の存続時期の下限及び遺構の性格を考える上で、小路遺跡の大溝の位置付けは参考となる。

大溝3は大溝2に取り付く溝としているが、下層土坑状遺構から弥生時代前期末～中期初頭の土器が出土していることから、大溝1との関連を考慮しておくことも必要である。

近世用水路は出土遺物から考えて、概ね18世紀以降に機能していたことが考えられる。吉田遺跡では関連する時期の遺構として、本部裏給水管埋設に伴う発掘調査³⁾で検出した近世大溝が挙げられる。この溝の掘削とともに行われたと考えられる現在の大学本部付近の開墾の契機を、本部2号館で検出された、肥前系の染付磁器碗を出土した第1号溝をめぐる屋敷跡と関連づけている。今回の調査で見つかった近世用水路は、本部裏の近世大溝と掘削の時期や目的が同様であった可能性が考えられる。本部裏の近世大溝は丘陵から低地へのなだらかな傾斜に交差するように流路方向を持つ。近世用水路も流路方向は、土

地の傾斜に交差している。また大溝1や大溝2とは流路方向を違えていることも興味深い。本部裏給水管の近世大溝は、本学統合移転直前まで開口していた可能性が指摘されているが、今回検出した近世水路は明治時代以降に埋め立てられており、その後に整備された水田が本学統合移転直前まで耕作されることになる。吉田遺跡のこれまでの調査成果を考えると、この地の大規模な開墾の開始は古代・中世まで遡ろうが、17世紀後半から18世紀初頭にかけての時期に水利施設の付け替えを伴うようなさらに大規模な耕地の再編がなされた可能性は考えられることで、今後の調査により明らかにすべき問題である。

注目される遺物として、小溝7で出土した前期弥生土器が挙げられる。この土器を特徴付ける肩部の段と沈線による無軸の羽状文は県内でも最古の要素であり、吉田遺跡の弥生集落の初現を考える上で重要である。また大土坑から出土した須恵器は、丁寧な作りでその出自が気になるほか、時期的にも非常に興味深い遺物である。従来の山口県の編年観からすると7世紀中頃の年代があてられる⁴⁾。ところが近年の研究では、実年代を繰り下げる年代観が提示され評価は定まっていない⁵⁾。今回出土の須恵器は、遺構に伴い出土したものではないため、土器編年への直接の関連は持ち得ない。しかし、当該期の遺物はこれまでも断片的にはあるが見つかっており、吉田遺跡にもこの時期の遺構が埋存している可能性が高く、今後の調査において遺構からの良好な状態での出土が期待される。

[注]

- 1) 木村忠夫「大溝について」(『小路遺跡』山口市埋蔵文化財調査報告第27集、山口市教育委員会、1988年)
- 2) 小野忠熙『山口県の考古学』吉川弘文館、1985年
- 3) 山口大学埋蔵文化財資料館「本部裏給水管管理に伴う発掘調査」(『山口大学埋蔵文化財資料館調査研究年報』XIII、1995年)
- 4) 桑原邦彦 池田善文「防長地域の須恵器窯跡と編年の研究」(『山口県の土師器・須恵器』、周陽考古学研究所、1981年)のV～VI期、大津郡日置町峠山2号窯跡灰原出土資料に対比できる。また、中村 浩『和泉陶邑窯の研究―須恵器生産の基礎的考察―』(柏書房、1981年)のⅢ型式2段階に該当。
- 5) 大林達夫「周防国府成立期の土器の年代観・序章」(『瓦衣千年―森郁夫先生還暦記念論文集―』、森郁夫先生還暦記念論文集刊行会、1999年)

Tab.7 出土遺物観察表(土器)

質量()は復元値

遺物番号	出土遺構	層位	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調 ①外面②内面	胎土	備考
1	大溝3	中・下層	縄文土器 深鉢	口縁部				にぶい黄褐色	1~5mmの長石・石英を含む	外面ナデ 後期
2	大溝2 3区	下層	縄文土器	口縁部				①にぶい黄褐色 ②灰色	1~3mmの長石・石英を多く含む	口唇部に1条の沈線 外面ナデ 内面ナデ 後期
3	大溝1 3区	下層	縄文土器	口縁部				褐灰色	1mm前後の長石・石英を含む	外面に2条の凹線 外面ナデ 内面ナデ 後期
4	大溝1 3区	下層	縄文土器	口縁部				①にぶい黄褐色 ②褐灰色	1~3mmの長石・石英を含む	外面に4条の凹線 外面ナデ 内面ナデ 後期
5	大溝1 2区	下層	縄文土器 深鉢	口縁部				①灰白色 ②黒褐色	1~3mmの長石・石英を含む	巻目による刻み 外面ナデ 内面横方向貝殻条痕 晩期
6	大溝1 3区	下層	縄文土器	胴部				①にぶい黄褐色 ②灰白色	1mm前後の長石・石英を含む	外面横方向貝殻条痕 内面ナデ
7	大溝1 2区	下層	縄文土器 深鉢	口縁部				①灰黄色 ②黒褐色	1~3mmの長石・石英を含む	貼付突帯を貝殻で刻む 外面ナデ 内面貝殻条痕 晩期
8	大溝1 1区	下層	縄文土器 深鉢	口縁部				①淡黄色 ②黒褐色	1~3mmの長石・石英を含む	貼付突帯 内面ナデ 晩期
9	大溝1 0区	上層	弥生土器 甕	口縁部 ~底部		(2.5)		淡褐色	1mm前後の砂粒を含む	ミニチュア土器 風化が激しい
10	大溝1 0区	上層	弥生土器 高坏	口縁部	(32.0)			にぶい橙色	1~3mmの砂粒を多量に含む	後期後半 風化が激しい
11	大溝2 1区	上層	弥生土器 高坏	脚部				浅黄褐色	1~7mmの砂粒を多量に含む	後期後半 内面の風化が激しい
12	大溝2 0区	下層	弥生土器 高坏	坏部				①淡黄褐色 ②黒褐色	1~3mmの長石・石英を含む	
13	大溝2 1区	下層	弥生土器 壺	底部		(4.2)		①赤色 ②明赤褐色	1~5mmの砂粒を含む	風化が激しい
14	大溝1・2 2区	攪乱	弥生土器 壺	口縁部				①灰黄色 ②暗褐色	精製粘土に1~2mmの砂粒をわずかに含む	
15	大溝2 2区		弥生土器 甕	底部				にぶい黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	内面の風化が激しい
16	大溝2	上層	弥生土器 甕	底部		(7.2)		①黄褐色 ②黒褐色	1~3mmの長石・石英を含む	外面被熱 風化が激しい
17	大溝3下層 土坑状遺構	1層	弥生土器 甕	口縁部				①にぶい黄褐色 ②浅黄褐色	1~3mmの長石・石英を含む	ヘラガキの6条沈線 前期末~中期初頭
18	大溝3	中・下層	弥生土器 高坏	坏部	(34.2)			浅黄褐色	3mm以下の砂粒を含む	後期後半
19	大溝3	中・下層	弥生土器 壺	口縁部 ~頸部	(14.2)			①黒褐色 ②オリーブ灰色	1~3mmの砂粒を含む	後期前半
20	大溝3	中・下層	弥生土器 高坏	脚部		(14.9)		①浅黄色 ②浅黄褐色	1~3mmの長石・石英と微量のチャートを含む	後期後半
21	大溝3下層 土坑状遺構	1・4層	弥生土器 甕	口縁部 底部	(23.1)	7.3	(24.5)	①淡黄色 ②暗灰黄色	1~3mmの長石・石英と微量のくさり礫を含む	前期末~中期初頭 モミ丘痕
31	小溝7	9層	弥生土器 壺	肩部				①黒色(黒斑部 分)②灰褐色	1mm前後の長石・石英を含む	前期前半 無軸羽状文 風化が激しい
32	小溝1		陶器 碗	体部 ~底部		(3.3)		素地 灰白色 軸 ①灰オリーブ色 ②灰白色	精緻	藁灰釉
33	小溝5	4層	弥生土器 壺	底部		(4.6)		①明赤褐色 ②明褐色	1~4mmの砂粒を多量に含む	風化が激しい
34	小溝9		土師質土器	底部		(7.5)		浅黄褐色	精緻	皿か
35	小溝9		弥生土器 壺	頸部				暗褐色	1~2mmの砂粒を含む	
38	大土坑		須恵器 坏	口縁部 ~底部	(14.4)	(9.2)	4.7	灰色	1mm前後の砂粒を含む	
39	近世用水路	2~4層	瓦質土器 足鍋	脚部				淡黄色	0.5~1.5mmの砂粒を含む	在地産
40	近世用水路	2~4層	陶器 甕	口縁部				灰色	1~3mmの砂粒を多く含む	
41	近世用水路	2~4層	土師質陶器 甕	口縁部 ~体部	(29.0)			浅黄褐色	0.5~1.5mmの砂粒をわずかに含む	在地産
42	近世用水路	2~4層	土師質陶器 甕	口縁部 ~体部	(29.7)			①浅黄褐色 ②にぶい橙色	0.5~1.5mmの砂粒をわずかに含む	在地産
43	近世用水路	2~4層	土師質土器 蓋	つまみ ~口縁部	(9.2)		3.0	にぶい黄褐色	0.5~1.5mmの砂粒を少量含む	型押し 在地産
44	近世用水路	2~4層	土師質土器	底部				にぶい黄褐色	0.5~1.5mmの砂粒を含む	在地産

出土遺物観察表

質量()は復元値

遺物 番号	出土遺構	層位	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調 ①外面②内面	胎土	備考
45	近世用水路	2~4層	土師皿	底部		5.7		にぶい黄橙色	微砂粒を少量含む	外底面回転ヘラ起こし 板目
46	近世用水路	2~4層	土師質陶器 盤	口縁部 ~底部				にぶい橙色	0.5~2mmの砂粒を 含む	在地産 平面形は長円形ま たは隅丸方形
47	近世用水路	2~4層	土師質土器 壺	口縁部	(73.2)			にぶい橙色	1~3mmの砂粒を含 む	在地産 埋壺
48	近世用水路	2~4層	土師質土器 壺	底部		(41.0)		浅黄橙色	1~3mmの長石・石 英を含む	在地産 風呂壺
49	近世用水路	2~4層	土師質土器 壺	口縁部				浅黄橙色	微砂粒を含む	在地産
50	近世用水路	2~4層	瓦質土器 壺	口縁部				①灰色 ②灰白色	微砂粒を含む	在地産
51	近世用水路	2~4層	土師質土器 壺	口縁部				浅黄橙色	1~3mmの長石・石 英を含む	在地産
52	近世用水路	2~4層	土師質土器 壺	底部				①にぶい黄色 ②淡黄色	1~3mmの長石・石 英を含む	在地産 風呂壺
53	近世用水路	2~4層	瓦質土器 播鉢	口縁部 ~体部	(29.5)			①③黄灰色 ②黒褐色	0.5~1mmの砂粒を 含む	17世紀以前
54	近世用水路	2~4層	瓦質土器 鉢	口縁部 ~体部	(18.1)			①②暗灰色 ③淡黄色	精緻	外面型押し
55	近世用水路	2~4層	瓦質土器	口縁部 ~体部	(11.1)			①黒色②灰色 ③にぶい黄色	微砂粒をわずかに 含む	在地産 土瓶あるいは釜か 外面型押し
56	近世用水路	2~4層	土師質土器	口縁部 ~体部	(10.3)			①浅黄橙色 ②にぶい橙色	0.5mm程度の砂粒 を含む	在地産 土瓶か
57	近世用水路	2~4層	土師質土器 羽釜	体部				①黒色 ②にぶい橙色	0.5~2.5mmの砂粒 をわずかに含む	外面に煤付着
58	近世用水路	2~4層	瓦質土器	口縁部 ~体部				灰黄色~灰白 色	0.5~2mmの砂粒を 含む	
59	近世用水路	2~4層	瓦質土器	底部				①③灰白色 ②明褐色	1~3mmの砂粒を含 む	
60	近世用水路	2~4層	瓦質土器 焙烙	口縁部 ~底部	(20.6)	(15.0)	5.0	①灰白色、黒褐 色②③灰白色	0.5~6mmの砂粒を 含む	在地産 型押し
61	近世用水路	2~4層	瓦質土器	底部				①②灰色 ③にぶい黄橙色	0.5~2mmの砂粒を 含む	
62	近世用水路	2~4層	陶器 皿	口縁部 ~体部	(9.2)			素地 淡黄色 釉 灰白色	精緻	萩焼 19世紀 薬灰釉 目跡あり
63	近世用水路	2~4層	陶器 鉢	口縁部 ~底部	(11.4)	(4.0)	4.2	素地 淡黄色 釉 灰白色	精緻	萩焼 19世紀 薬灰釉
64	近世用水路	2~4層	陶器 鉢	口縁部 ~体部	(11.5)			素地 浅黄橙色 釉 灰白色	精緻	萩焼 19世紀 薬灰釉
65	近世用水路	2~4層	陶器 鉢	口縁部 ~体部	(11.7)			素地 灰白色 釉 褐~黒色	精緻	萩焼 19世紀 鉄釉
66	近世用水路	2~4層	陶器	体部 ~底部		3.9		素地 灰オリーブ 色 釉 灰白色	精緻	萩焼 19世紀 内面に凹線 1条 薬灰釉
67	近世用水路	2~4層	陶器 碗	口縁部 ~底部	(9.4)	(3.4)		素地 淡黄色 釉 灰白色	精緻	萩焼 19世紀 薬灰釉
68	近世用水路	2~4層	陶器 碗	底部		(4.1)		素地 淡黄色 釉 灰白色	精緻	萩焼 19世紀 薬灰釉
69	近世用水路	2~4層	陶器 碗	体部 ~底部		3.8		素地 にぶい黄 色 釉 灰白色	精緻	萩焼 19世紀 薬灰釉
70	近世用水路	2~4層	陶器 碗	体部 ~底部		3.0		素地 灰白色 釉 灰白色	精緻	萩焼か 薬灰釉
71	近世用水路	2~4層	陶器 碗	体部 ~底部		(3.3)		素地 淡黄色 釉 灰白色	精緻	灰釉
72	近世用水路	2~4層	陶器	体部 ~底部		(9.1)		素地 浅黄色 釉 淡黄色	精緻	皿または鉢 薬灰釉
73	近世用水路	2~4層	陶器 鉢	体部 ~底部		(7.0)		素地 浅黄橙色 釉 透明	精緻	灰釉 目跡あり
74	近世用水路	2~4層	陶器 瓶	体部 ~底部		(6.1)		素地 にぶい黄 色 釉 黄灰~灰黄色	精緻	拵筒底 灰釉
75	近世用水路	2~4層	陶器	体部 ~底部		(9.1)		素地 灰白色 釉 褐色	精緻	壺または徳利 鉄釉
76	近世用水路	2~4層	陶器 鉢	体部 ~底部		(7.4)		①②にぶい褐 色 ③灰色	精緻	焼締
77	近世用水路	2~4層	陶器 播鉢	口縁部 ~体部	(32.4)			①②褐色~黒 褐色 ③黄灰色	1~3mmの砂粒を含 む	肥前系 19世紀

吉田構内第2屋内運動場新営に伴う発掘調査

法量 () は復元値

遺物番号	出土遺構	層位	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調 ①外面②内面	胎土	備考
78	近世用水路	2~4層	陶器 掃鉢	体部 ~底部			9.7	①③灰黄褐色 ②灰色・黄灰色	精緻	萩焼 重ね焼き痕あり
79	近世用水路	2~4層	陶器 鉢	体部 ~底部			(10.0)	①③灰白色・墨灰色 ②にみい橙色	精緻	肥前系 18世紀
80	近世用水路	2~4層	陶器	体部				素地 浅黄橙色 釉 暗褐色	精緻	壺か 外面に貼付文とヘラ 描き 鉛釉
81	近世用水路	2~4層	磁器 皿	口縁部 ~底部	(12.7)	(7.6)	3.9	素地 灰白色 釉 明緑灰色	精緻	染付 肥前系 18世紀
82	近世用水路	2~4層	陶器 碗	体部 ~底部			(4.4)	素地 灰白色 釉 透明	精緻	陶胎染付 肥前系
83	近世用水路	2~4層	磁器 紅皿	口縁部 ~底部	(4.1)	1.3	1.4	素地 白色 釉 白色	精緻	白磁 肥前系
84	近世用水路	2~4層	磁器 碗	体部 ~底部			(4.0)	素地 灰白色 釉 明緑灰色	精緻	染付 肥前系
85	近世用水路	2~4層	磁器 瓶	体部 ~底部			4.3	素地 灰白色 釉 明緑灰色	精緻	色絵 肥前系か
86	近世用水路	2~4層	磁器 碗	口縁部 ~体部				素地 灰白色 釉 透明	精緻	染付
87	近世用水路	2~4層	磁器 碗	口縁部 ~体部	(11.3)			素地 灰白色 釉 透明	精緻	染付
88	近世用水路	2~4層	磁器 碗	口縁部 ~体部	(7.3)			素地 灰白色 釉 透明	精緻	染付 近・現代
89	近世用水路	2~4層	陶器 皿	体部 ~底部			4.6	素地 淡黄色 釉 白色	精緻	肥前系 見込み蛇の目状釉 剥き 高台内墨書あり
90	近世用水路	2~4層	磁器 皿	体部 ~底部			4.5	素地 白色 釉 白色	精緻	白磁 肥前系 見込み蛇の 目状釉剥き

Tab.8 出土遺物観察表(石器・石製品)

法量 () は復元値

遺物番号	出土遺構	層位	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考
22	大溝1・2 1区		砥石	(12.9)	7.8	7.6	170.3	凝灰岩	中型・硬質
23	大溝1 1区	上層	砥石	22.0	8.7	6.2	2304.9	結晶質凝灰岩	中型・硬質
24	大溝1 2区	下層	磨石・蔽石	(6.8)	8.7	6.2	560.7	角閃石ひん岩	
25	大溝1 0区	上層	台石	(9.4)	(9.2)	(5.5)	360.3	凝灰岩	
26	大溝1 1区	上層	使用痕のある剥片	4.3	2.2	0.8	6.6	ホルンフェルス	縦長剥片
27	大溝1 2区	下層	剥片	1.7	2.6	0.3	0.9	安山岩	横長剥片
28	大溝1・2 2区		砥石	(3.7)	(2.5)	1.6	11.8	砂岩	小型・軟質・中粒砥石
29	大溝2 0区		砥石	4.4	3.7	1.1	19.7	砂岩	小型・軟質・中粒砥石 被熱
30	大溝1 3区	上層	砥石	5.7	2.9	1.0	16.9	ひん岩	小型・硬質
36	小溝5	5層	楔形石器	2.5	1.8	1.3	4.8	姫島産黒曜石	
37	表採		剥片	2.8	1.4	0.4	1.2	黒曜石	縦長剥片
91	近世用水路	2~4層	砥石	(8.9)	6.8	(2.8)	169.7	ひん岩	中型・硬質
92	近世用水路	2~4層	砥石	(6.8)	(7.8)	(1.4)	103.5	頁岩	中型・軟質・細粒砥石

Tab.9 出土遺物観察表(木製品)

法量 () は復元値

遺物番号	出土遺構	層位	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	樹種	備考
93	近世用水路	2~4層	下駄	14.0	5.5	2.2			連歯

吉田構内全景（南から）





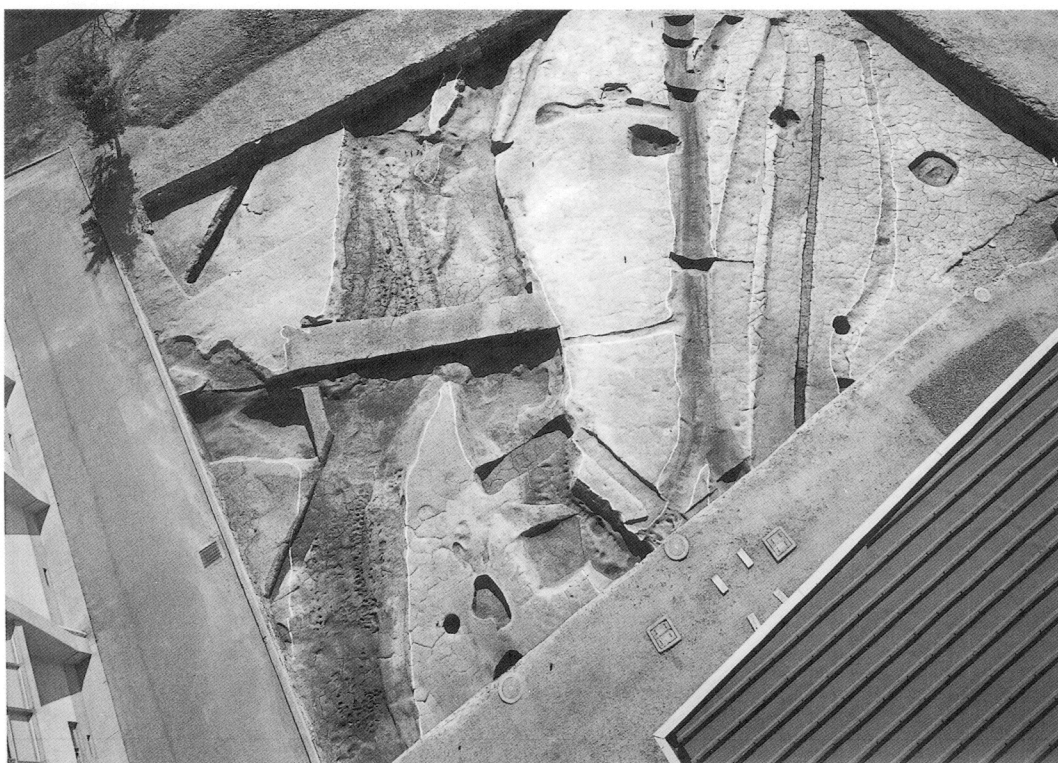
(1) 調査前全景 (東から)



(2) 遺構完掘状況 (南上空から)



(1) 大溝 1・2 検出状況 (北東から)



(2) 大溝 1・2 完掘状況 (北東上空から)



(1) 大溝1 完掘状況 (北から)



(2) 大溝1 完掘状況 (南から)



(3) 大溝2 完掘状況 (北から)



(4) 大溝2 完掘状況 (南から)



(1) 大溝1土層断面(北壁部分・南から)



(2) 大溝1土層断面(BB'断面・南西から)



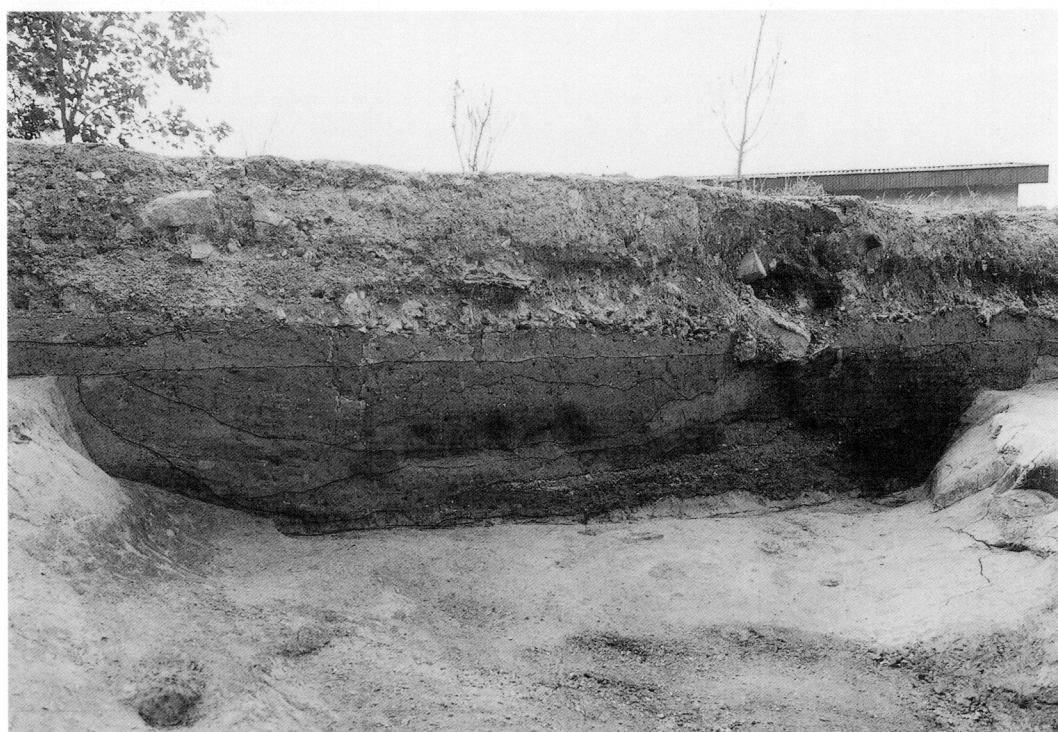
(3) 大溝1土層断面(南壁部分・北から)



(1) 大溝2土層断面(AA'断面・南西から)



(2) 大溝2土層断面(BB'断面・南西から)



(3) 大溝2土層断面(南壁部分・北から)



(1) 大溝2 杭跡列配列状況 (南西から)



(2) 大溝2 杭跡列配列状況 (東から)



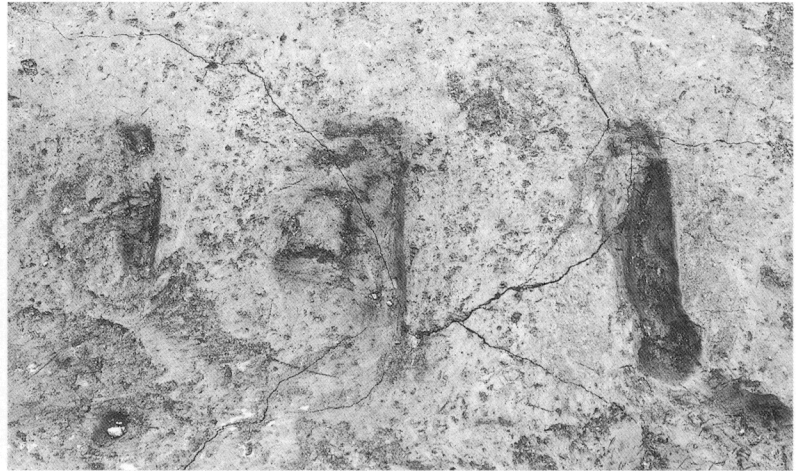
(1) 大溝 2 杭跡列検出状況 (東から)



(2) 大溝 2 杭跡列完掘状況 (東から)



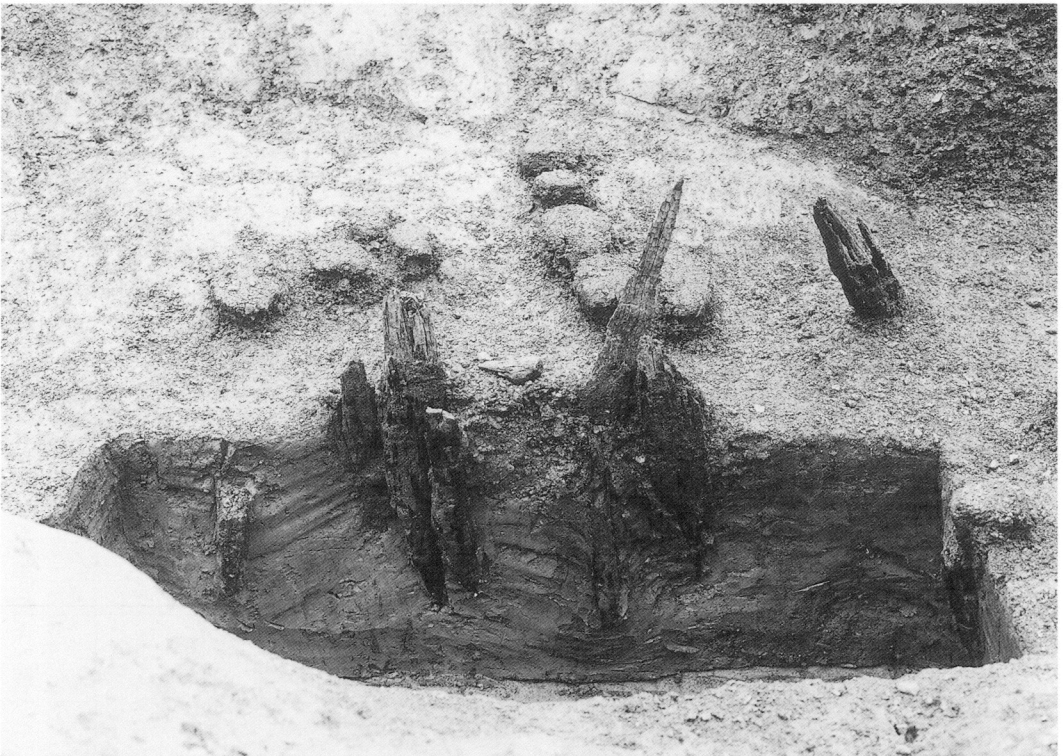
(3) 大溝 2 杭跡列検出状況拡大 (東から)



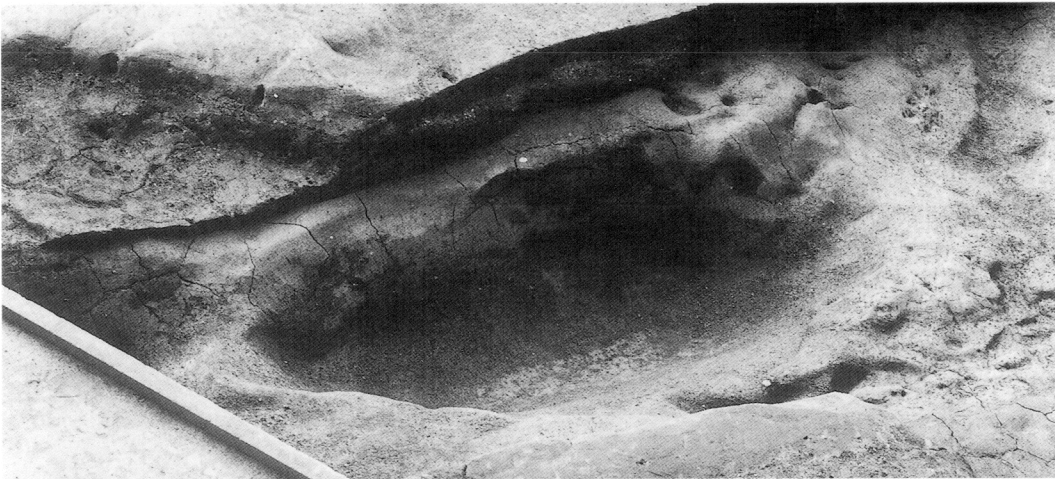
(4) 大溝 2 杭跡列完掘状況拡大 (東から)



(1) 大溝 2 杭列検出状況 (南東から)



(2) 大溝 2 杭列断ち割り状況 (北東から)



(1) 土坑1 完掘状況 (北東から)



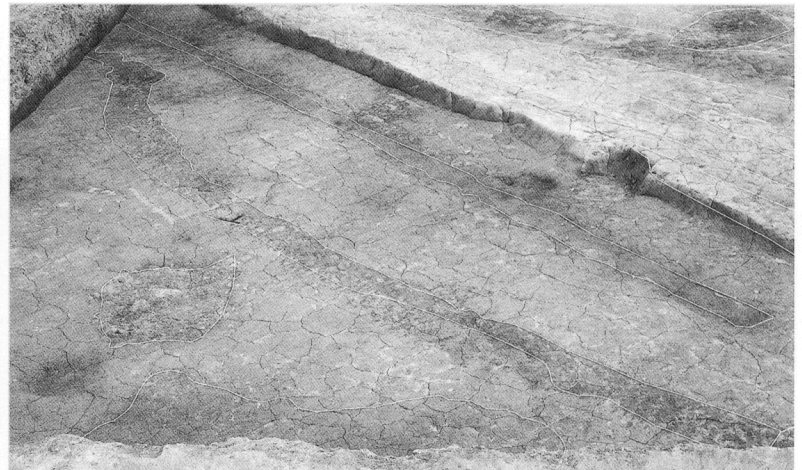
(2) 土坑1 土層断面 (南東から)



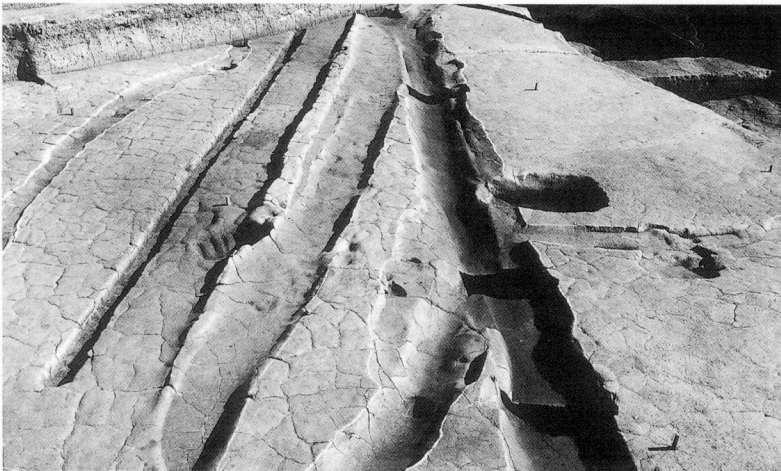
(3) 土坑1 土層断面 (南西から)



(1) 小溝1・2・5・7・9検出状況(南西から)



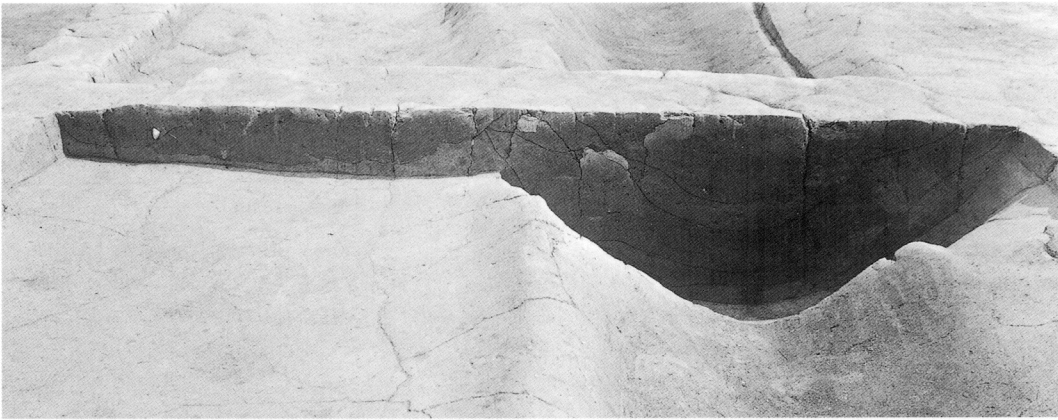
(2) 小溝5・7・9及び大土坑検出状況(西から)



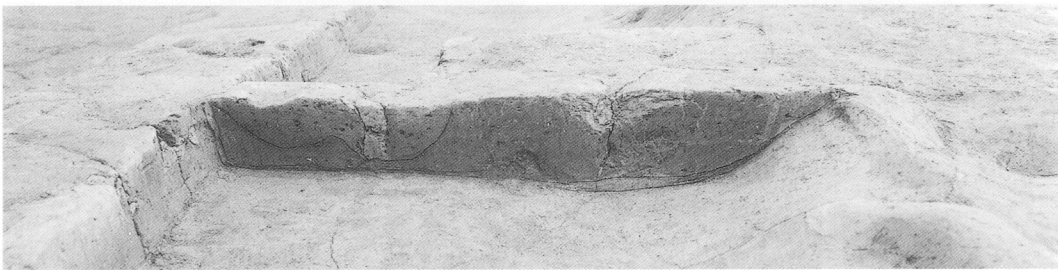
(3) 小溝1・2・5・7・9完掘状況(南西から)



(4) 小溝7完掘状況(南西から)



(1) 小溝 1・2・5・7 土層断面 (FF'断面・南西から)



(2) 小溝 1・2 土層断面 (GG'断面・南西から)



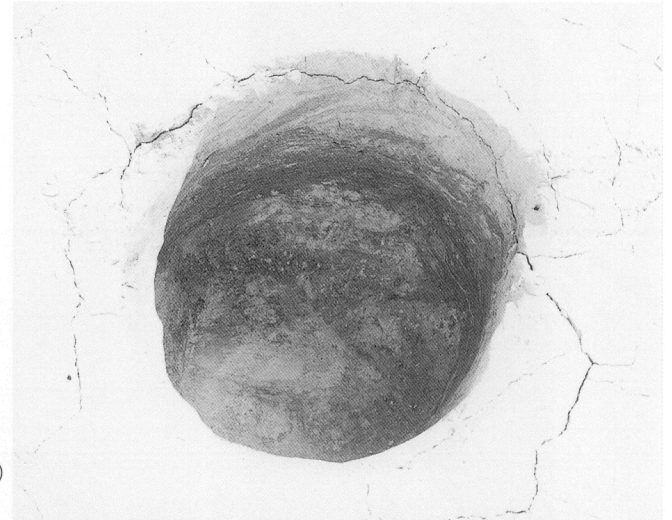
(3) 小溝 5・7 土層断面 (GG'断面・南西から)



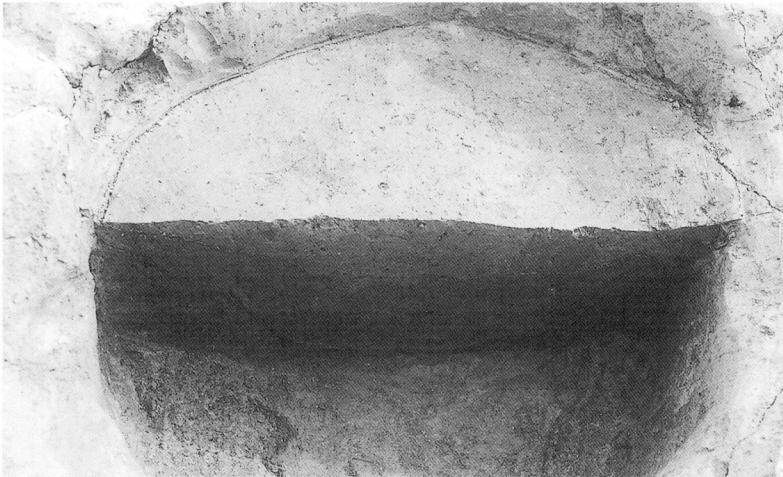
(4) 小溝 5・7 土層断面 (JJ'断面・南西から)



(1) 貯蔵穴内炭化物層
上面検出状況(北から)



(2) 貯蔵穴完掘
状況(北から)



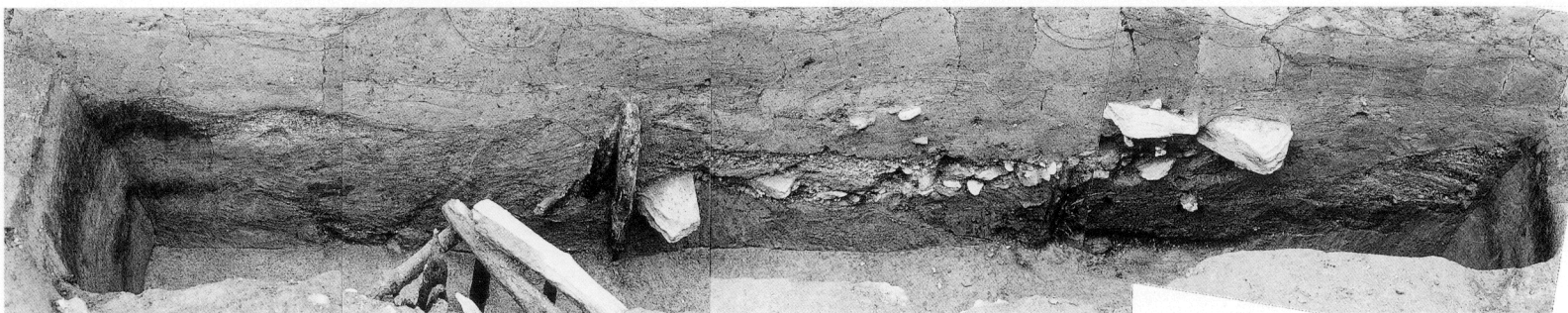
(3) 貯蔵穴上部土層断面(北から)



(4) 貯蔵穴内炭化物層土層断面(北から)



(1) 大土坑完掘状況
及び土層断面(西壁
部分・北東から)



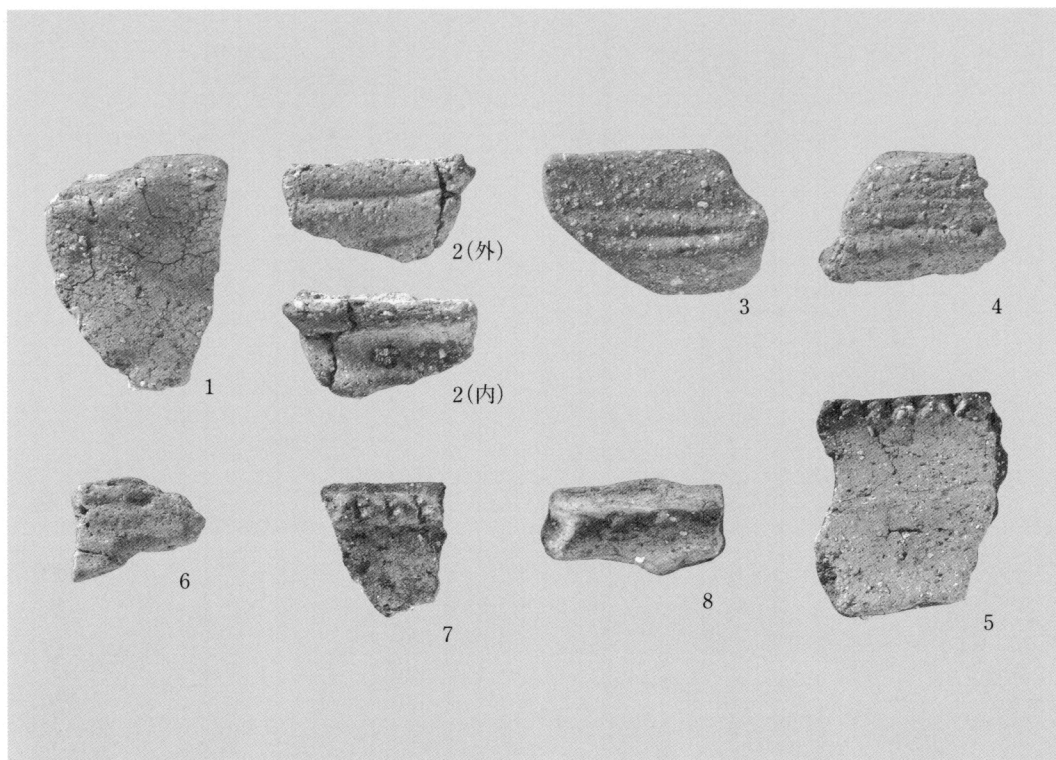
(2) 近世大溝土層断面(西壁部分・東から)



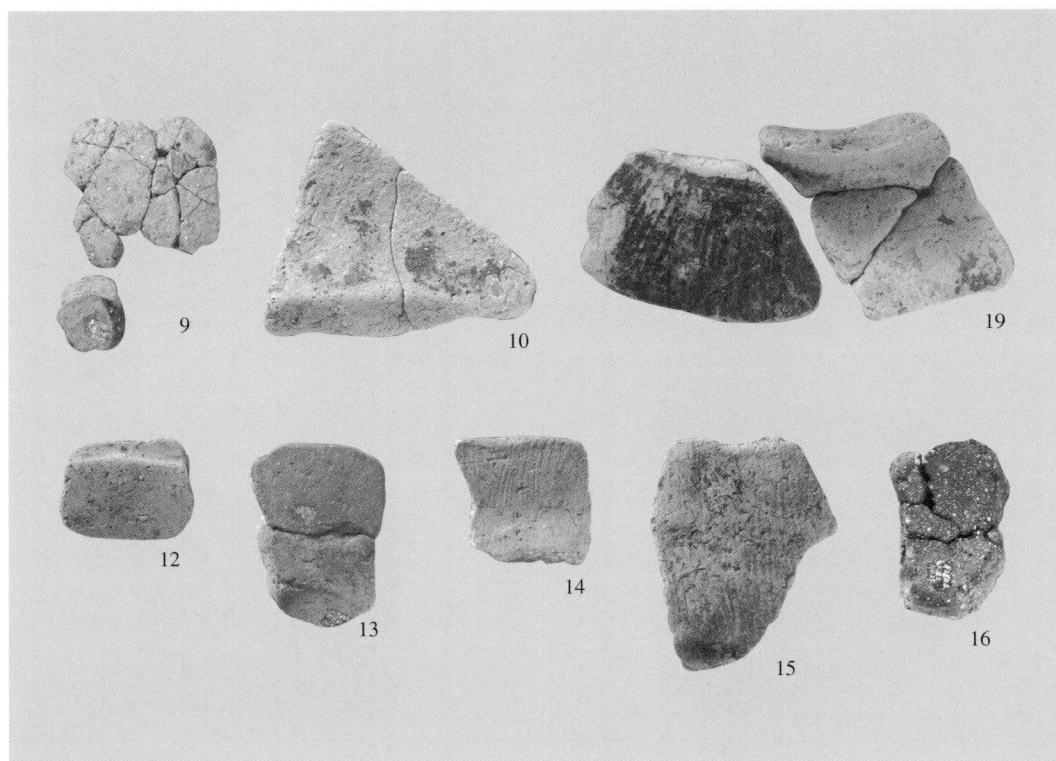
(1) 配管等埋設部分調査区全景（南から）



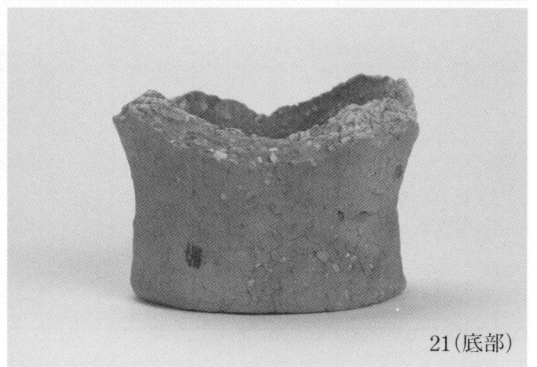
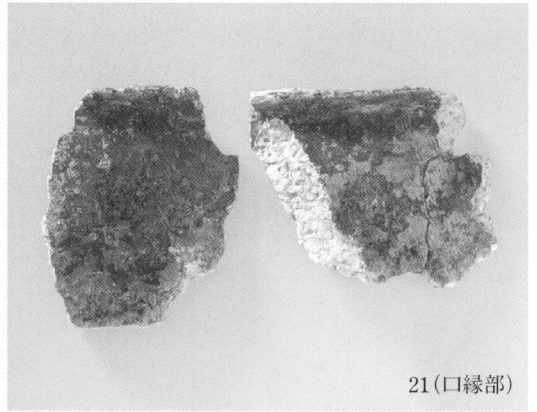
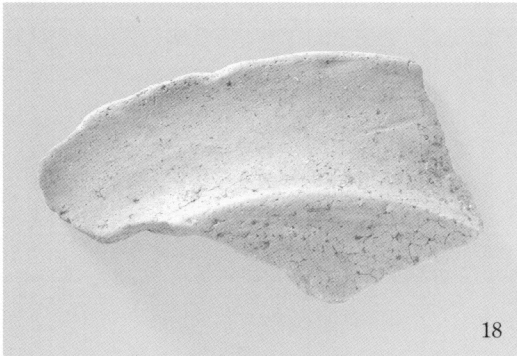
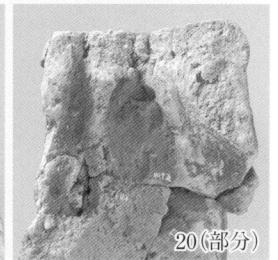
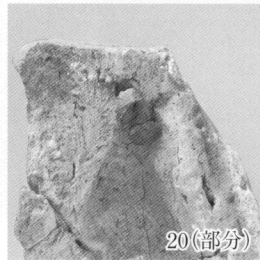
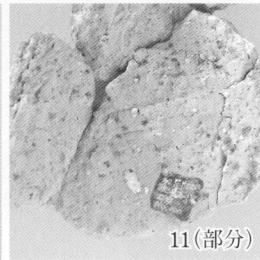
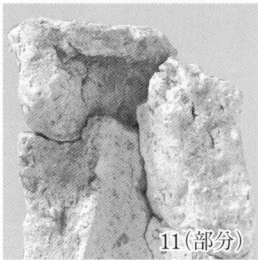
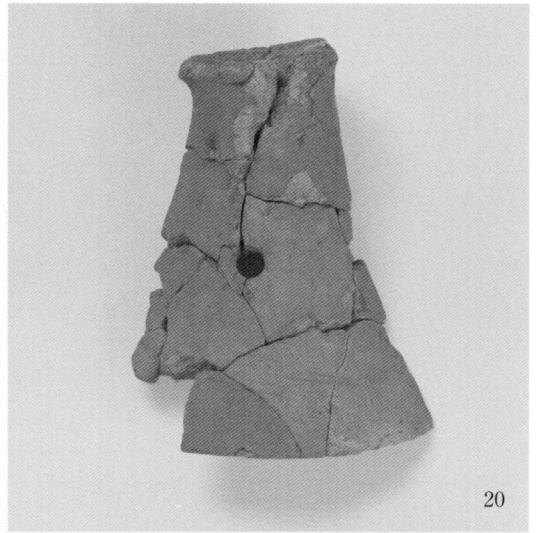
(2) 配管等埋設部分調査区土層断面（南西から）



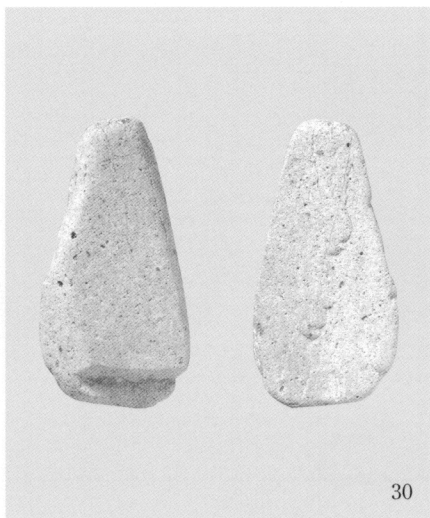
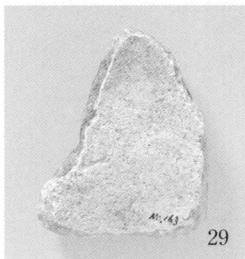
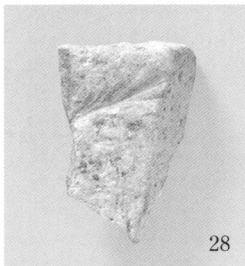
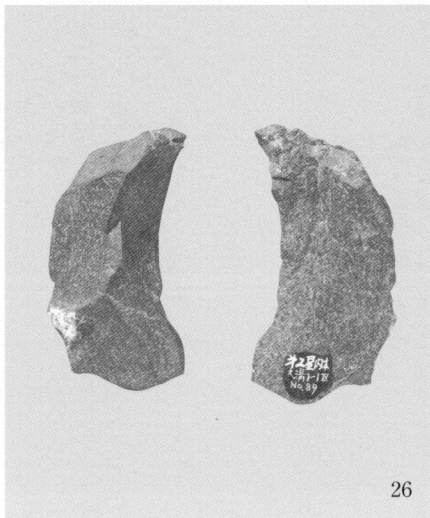
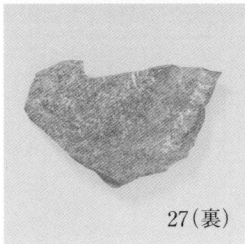
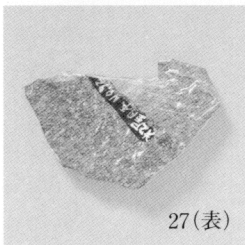
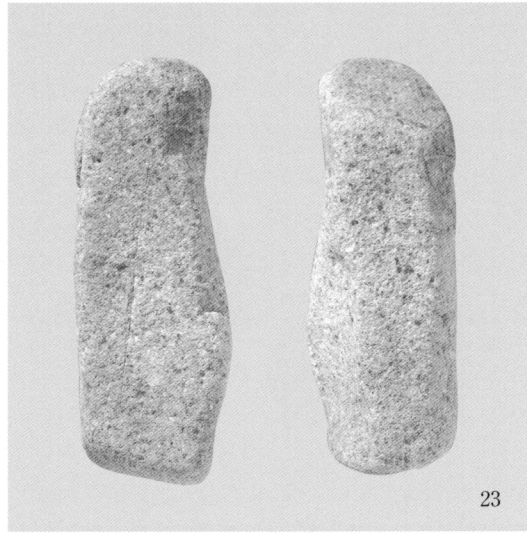
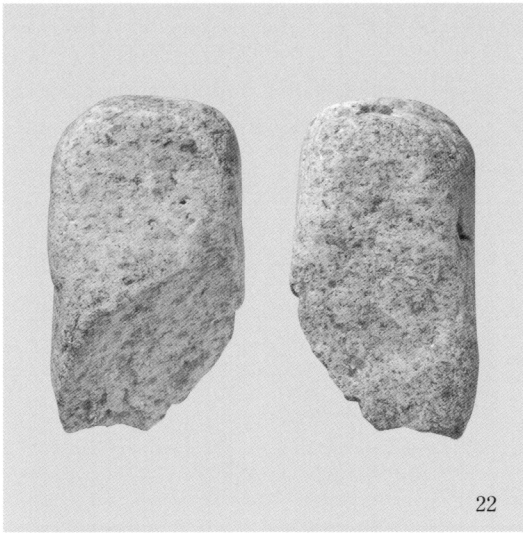
(1) 大溝1・2・3出土縄文土器



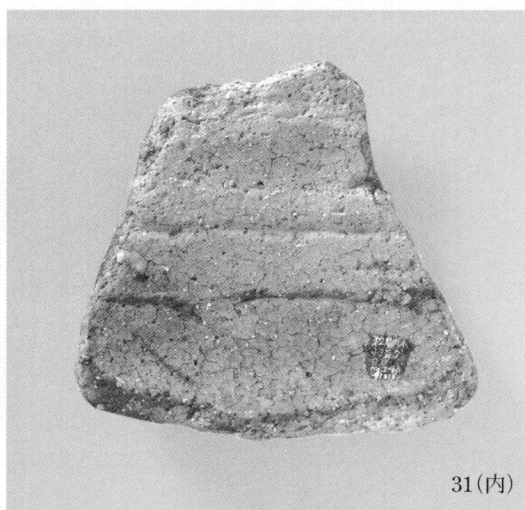
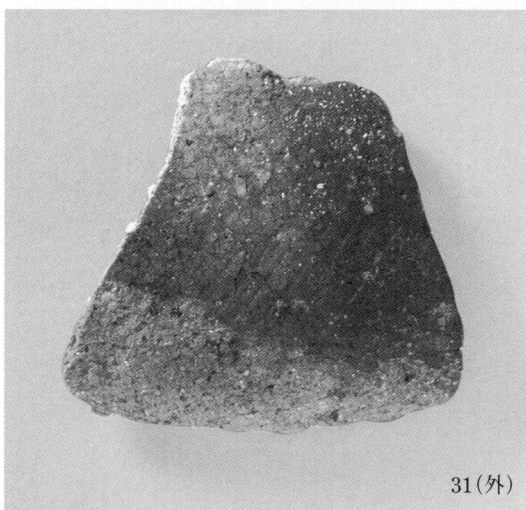
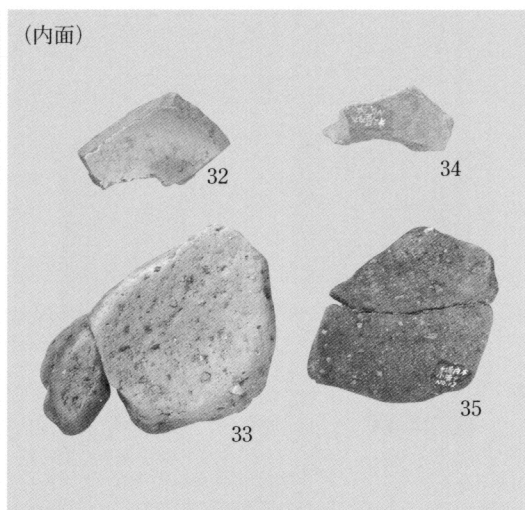
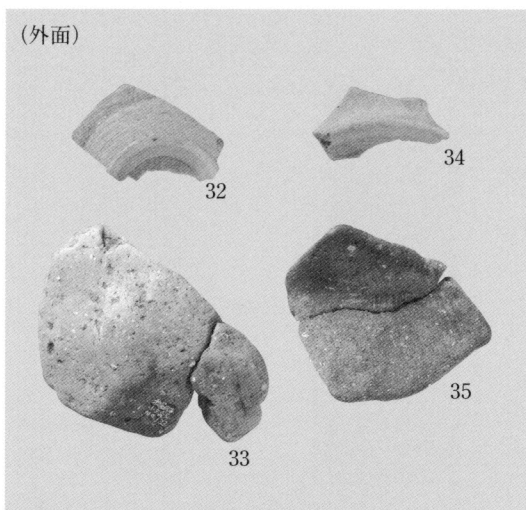
(2) 大溝1・2・3出土弥生土器



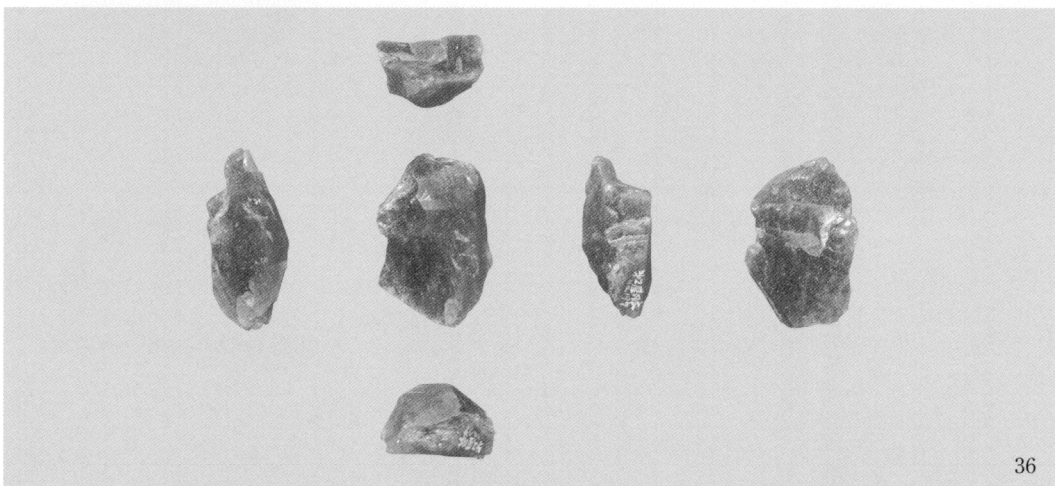
大溝2・3出土弥生土器



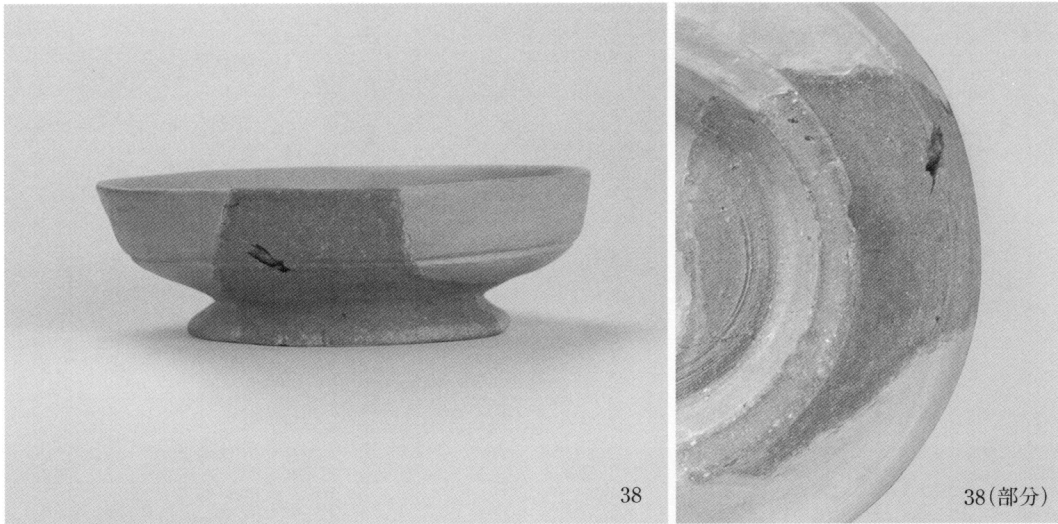
大溝1・2出土石器



(1) 小溝 1・5・7・9 出土土器



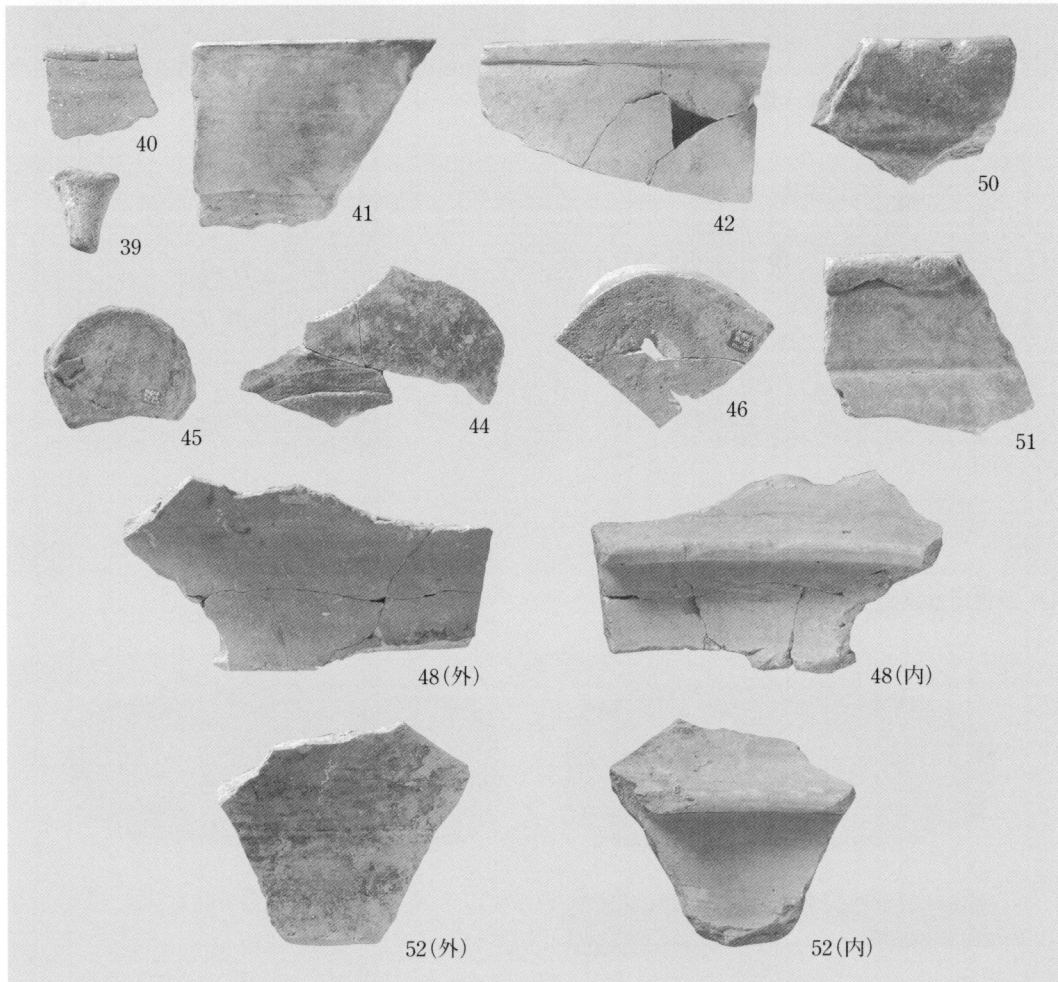
(2) 小溝 5 出土石器



38

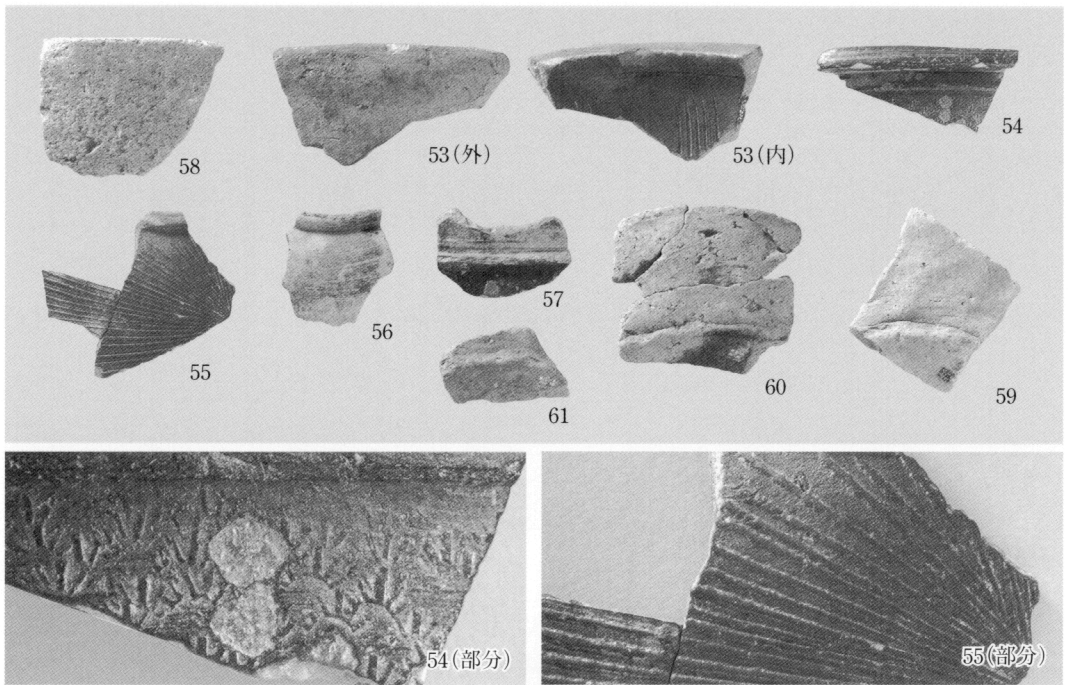
38(部分)

(1) 大土坑出土土器

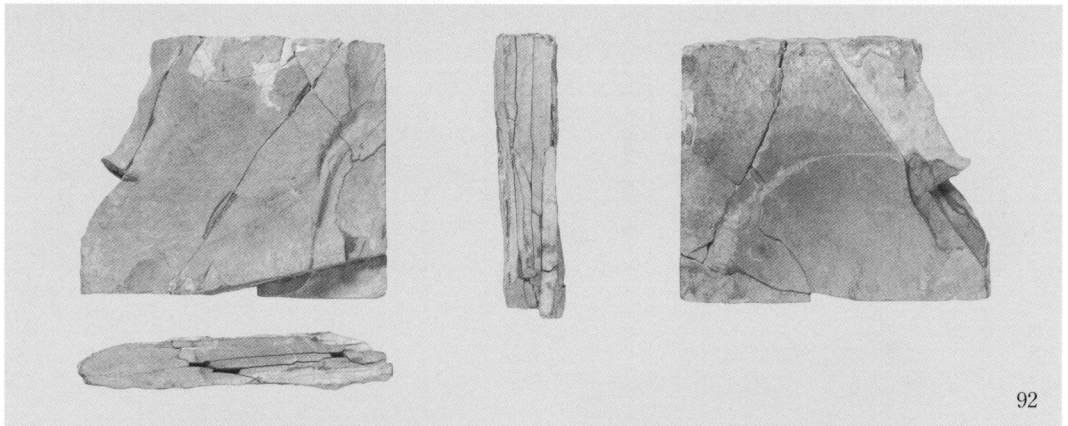


(2) 近世用水路出土土器・粗陶器①

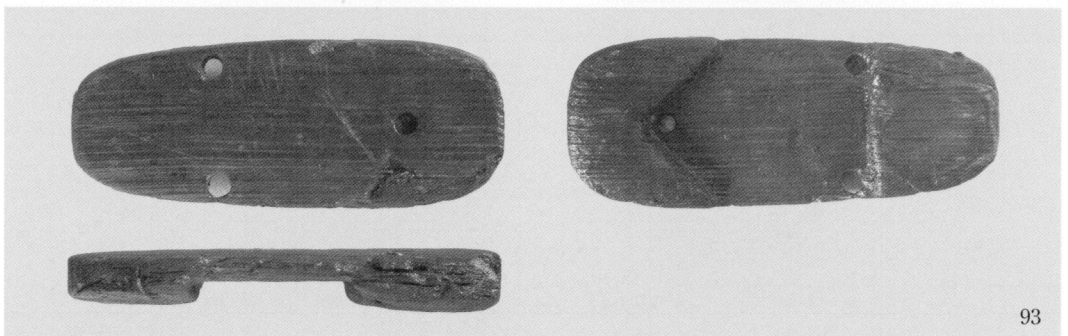
吉田構内第2屋内運動場新宮に伴う発掘調査
二〇



(1) 近世用水路出土土器・粗陶器②



(2) 近世用水路出土砥石



(3) 近世用水路出土下駄



43(外)



43(内)



83(外)

(1) 近世用水路出土土師質土器



63



63(部分)



83(内)

(2) 近世用水路出土陶器①

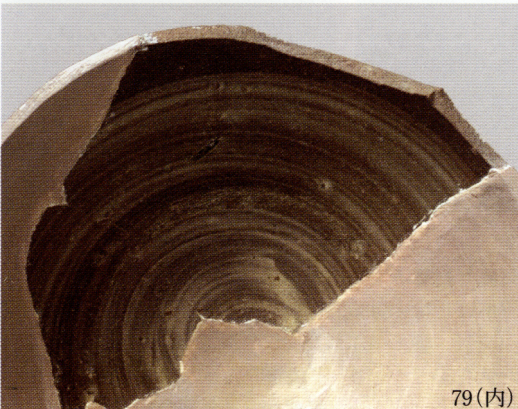
(3) 近世用水路出土磁器①



79



81



79(内)



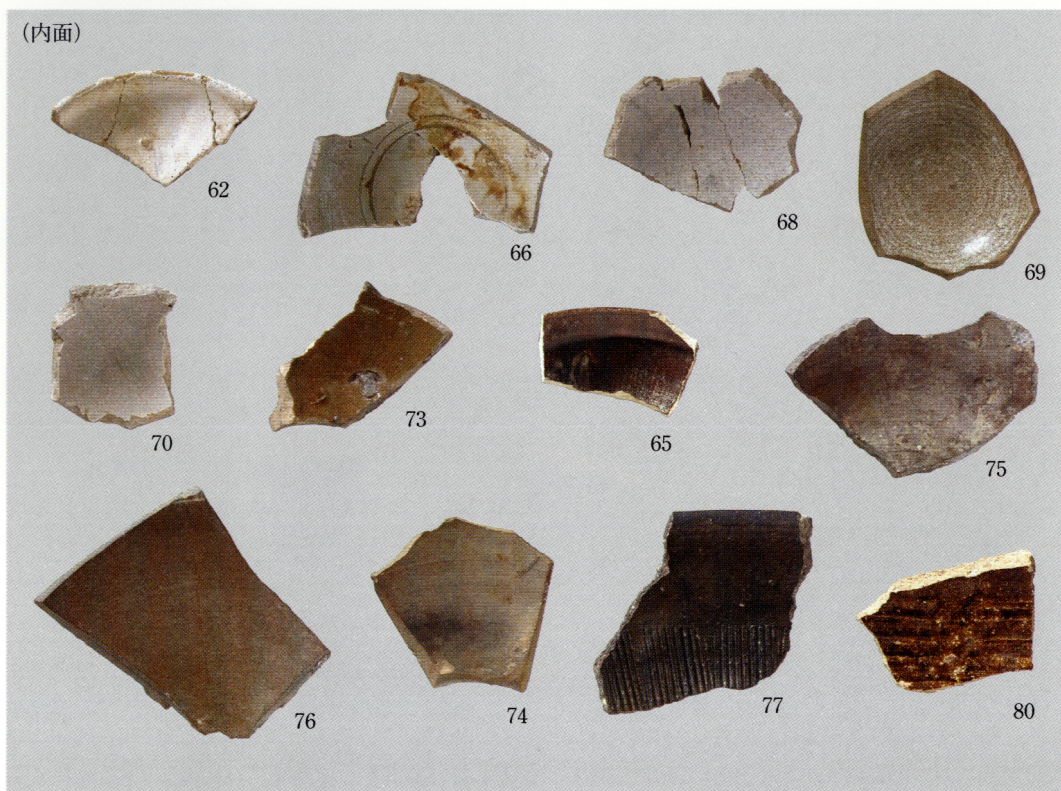
81(内)



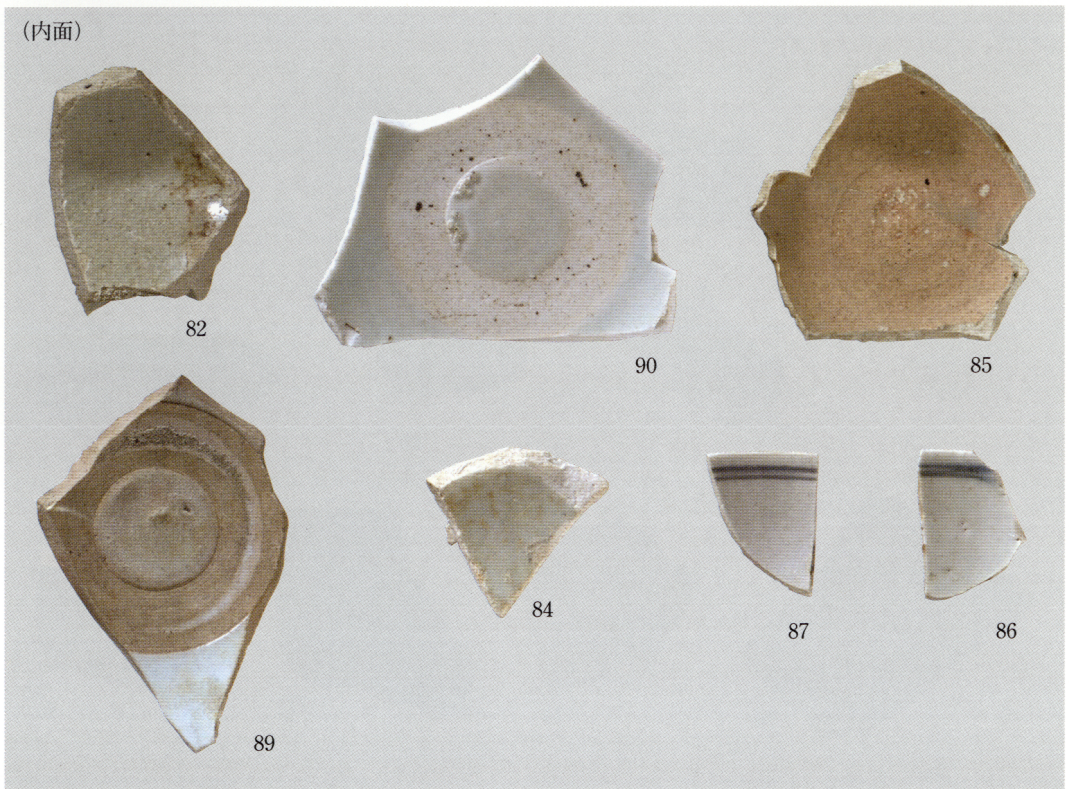
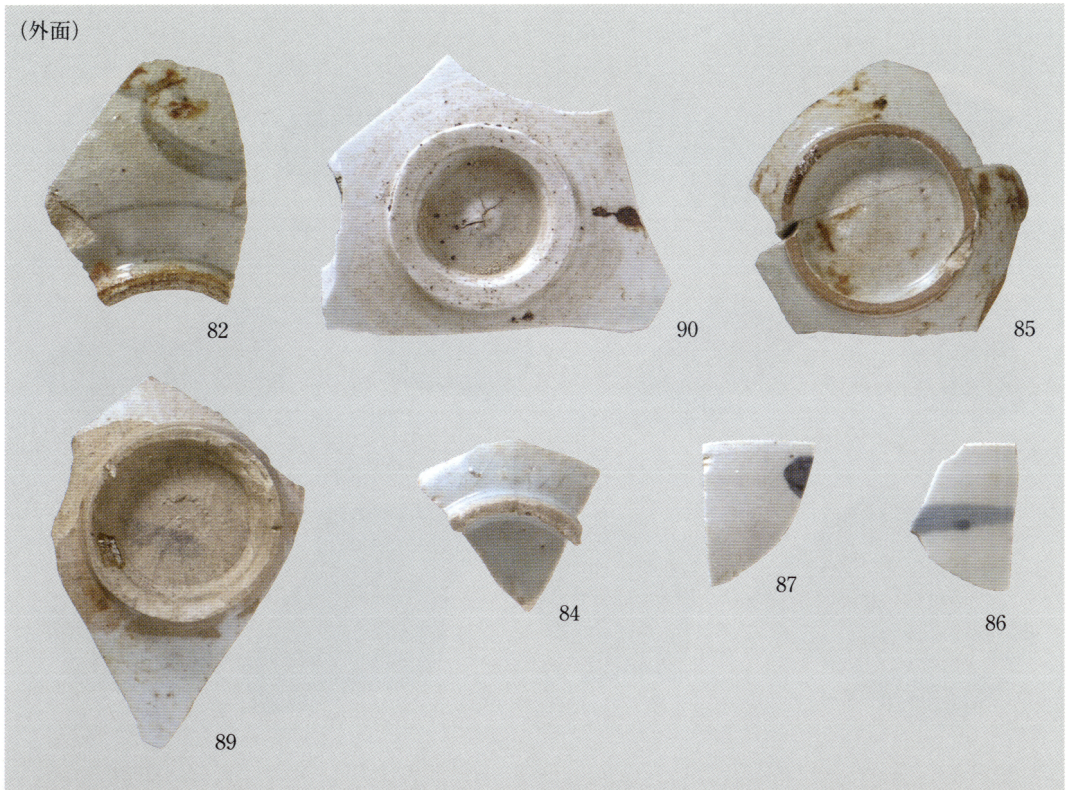
81(外)

(4) 近世用水路出土陶器②

(5) 近世用水路出土磁器②



近世用水路出土陶器③



近世用水路出土磁器③